

千葉県ほん だ た かだ誉田高田貝塚確認調査報告書

平成 2 年度



財団法人 千葉県文化財センター

序

千葉県には、2万か所にのぼる多数の遺跡が所在しますが、その中で縄文時代以降の貝塚は647か所確認されています。これらの貝塚は所在数、個々の外見・規模などは周知のところですが、一部の著名な貝塚を除いてはその実態があきらかにされた例は数少ないのが実情です。

このため、千葉県教育委員会では、昭和63年度から国庫補助を受けて、これらの貝塚のうち重要性が高く、かつ開発等の影響を受けるおそれのあるものについて、今後の保護、活用のための資料を得る目的で、測量及び確認調査を実施し、その実態を明らかにしてきました。

今年度は、千葉市高田町に所在する誉田高田貝塚の調査を実施しました。その結果、従前、縄文後期に形成されたと考えられていた本貝塚は晩期にも及び、当該期の遺物に加えて住居跡や埋葬施設などの所在が確認できました。特に、埋葬施設としては、土壙墓で再葬骨が出土するなど大きな成果が得られました。

このたび、この調査成果を報告書として刊行する運びとなりましたが、本書が学術資料としてはもとより、文化財の保護、活用の一助として、広く一般の方々にも利用されることを願ってやみません。

終わりに、文化庁を始め、千葉市教育委員会、財団法人千葉県文化財センター、土地所有者を始めとする地元の皆様に心から御礼申し上げます。

平成3年3月

千葉県教育庁生涯学習部

文化課長 福田 誠

凡 例

1. 本書は、千葉県千葉市高田町888他に所在する誉田高田貝塚（遺跡コード201—092）の確認調査報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて行っている県内主要貝塚確認調査の第3年次であり、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
3. 調査は、平成2年10月1日から同年10月31日まで実施した。
4. 調査及び整理・報告書作成は、研究部長 堀部昭夫、部長補佐 渡辺智信の指導のもとに、技師 出口雅人が担当した。
5. 脊椎動物の同定を千葉県立中央博物館 小宮 孟氏に、1・2・3号人骨の鑑定を東京慈恵会医科大学第1解剖学教室 加藤 征氏にお願いした。
6. 調査の実施に当たっては、千葉市教育委員会、所有地を快く貸して下さった石井 年、石井久也、大塚末吉、高橋誉文、高橋寿雄、高橋正義、若菜まき氏、遺跡について御教示下さった金子広芳、高橋資幸、斎藤繁康の各氏をはじめとした高田町の皆様等より多大の御協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表するものである。
7. 現地調査から報告書執筆にいたるまで、下記の諸氏から多くの御指導、御協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表するものである（敬称略）。

加藤 征 小宮 孟 浅野浩明
8. 本書に使用した地図は、国土地理院発行1/50,000地形図（千葉）である。

本文目次

序 文

凡 例

I	はじめに	1
	1. 遺跡の位置と環境	1
	2. 周辺の遺跡	1
II	調査経過	3
	1. 調査経過	3
	2. 調査方法	4
	3. 各トレンチの状況	4
III	検出遺構	8
IV	出土遺物	12
	1. 土 器	13
	2. 石器・骨角器・土製品	22
	3. 動物遺存体	23
	4. 貝サンプルの分析	25
V	出土人骨	30
	1. 1・2号人骨	30
	2. 3号人骨	31
	3. 7T人骨群	31
VI	ま と め	38
	1. 集落の時期	38
	2. 貝層の分布	39
	3. 遺構配置と集落の範囲	39
	4. 生産活動	40
	5. 貝塚形成当時の海岸線	41
	6. 貝塚集落の分布	41
	7. 多数個体埋葬墓の類例	44
	8. おわりに	44

挿図目次

第1図	誉田高田貝塚の位置と周辺遺跡…… 2	第15図	トレンチ出土土器(1) ……16
第2図	1954年の調査区…… 3	第16図	トレンチ出土土器(2) ……17
第3図	2 T・3 T …… 5	第17図	トレンチ出土土器(3) ……19
第4図	6 T …… 7	第18図	トレンチ出土土器(4) ……20
第5図	7 T …… 7	第19図	石器 ……22
第6図	2 T-09 …… 8	第20図	骨角器 ……23
第7図	3 T-01 …… 9	第21図	土製品 ……23
第8図	貝サンプル採取位置 …… 9	第22図	1・2号人骨 ……30
第9図	3 T-09 ……10	第23図	7 T人骨群部位別出土状況(1) ……32
第10図	4 T-01 ……11	第24図	7 T人骨群部位別出土状況(2) ……33
第11図	6 T-08・09・26 ……11	第25図	土器片分布状況 ……38
第12図	遺構出土土器(1) ……13	第26図	都川周辺の後期貝塚 ……43
第13図	遺構出土土器(2) ……14	第27図	誉田高田貝塚周辺の地形 (図版扉裏)
第14図	遺構出土土器(3) ……15	折込付図	誉田高田貝塚地形測量図 …… 巻末

表目次

表 1	基準杭の座標値 …… 4	表 6	貝類の計測値比較 ……28
表 2	石器計測値 ……22	表 7	貝類計測値分布 ……29
表 3	動物遺存体種名一覧 ……24	表 8	7 T人骨群最少個体数 ……35
表 4	貝サンプル一覧 ……26	表 9	誉田高田貝塚出土人骨 ……36
表 5	貝類同定結果 ……29	表 10	都川周辺の後期貝塚一覧 ……42

図版目次

図版 1	1. 空からみた誉田高田貝塚周辺の地形		
図版 2	1. 遺跡の景観(1)	2. 遺跡の景観(2)	
図版 3	1. 1 T	2. 2 T	3. 2 T-01
図版 4	1. 3 T-01貝層検出状況	2. 3 T-03貝層検出状況	3. 3 T-24検出状況
図版 5	1. 1・2号人骨(1)	2. 1・2号人骨(2)	3. 3 T-09鹿角出土状況
図版 6	1. 3 T-09骨出土状況	2. 5 T	3. 6 T
図版 7	1. 6 T-01	2. 6 T-01-1	3. 7 T-01人骨群
図版 8	1. 7 T-01椎骨出土状況	2. 7 T-01土壌検出状況	3. 3号人骨
図版 9	1. 遺構出土土器(1)		
図版 10	1. 遺構出土土器(2)		
図版 11	1. トレンチ出土土器(1)		
図版 12	1. トレンチ出土土器(2)		
図版 13	1. トレンチ出土土器(3)		
図版 14	1. 石器・土製品・骨角器		

I はじめに

1. 遺跡の位置と環境 (第27図)

菅田高田貝塚は、千葉市の内陸部、外房線菅田駅の北方約2.3kmのところに位置する。この付近は、千葉市内でも標高の高いところで、東京湾へ注ぐ都川水系の最奥部にあたり、同時に印旛沼、利根川を通じて太平洋に注ぐ鹿島川水系との分水界とも接近している。都川流域は縄文時代中・後期を中心とする貝塚の宝庫であり、その数からも、内容からも貝塚研究の上でおそらくこれ以上のフィールドは存在しない。本遺跡は、この都川流域貝塚群の中でも最も谷奥に位置する貝塚として注目されてきた。

遺跡の西側は都川の本谷に面し、東側はその谷から分岐した浅い谷が南北から入っており、緩斜面によって区切られている。冬寒台^{とうかんだい}という旧字名が示すように、冬季の西風は激しく、遺跡の表土を東へ運んでいる。また、わずかな雨でも表土が谷へ流出することが観察されている。東側の浅谷はこういった土砂の運搬作用によって次第に埋まっていったと考えられる。

遺跡の現況は、西側斜面部の杉の植林地を除けば一面の畑であり、耕作機械の導入によって、遺物は著しく細片化している。しかし、耕作土の下にある多量の貝や土器、骨などがこれ以上混じることのないように、深い耕土を必要とするいわゆる「根もの」は作られていない。近世の新田開発以来、遺跡はこのことによって守られてきたといってもよいであろう。

2. 周辺の遺跡 (第1・26図)

縄文時代の周辺遺跡の分布状況を見ると、前期までは遺跡数がとても少なく、中期加曽利E期以降に急増している。第1図には中・後期の主な遺跡を示したが、加曽利B期にはこれ以外に多数の包含地が知られており、遺跡数はピークを向かえるようである。周辺が比較的開発の及んでいない地域であるためか、発掘された遺跡はごく限られているが、野呂町、川井町付近では最近いくつかの調査が行われている¹。いずれも加曽利E・加曽利B期を主体とした遺構・遺物が発見された。この近くには、古くから知られていた野呂山田貝塚・八反目台貝塚・川井貝塚があり、いずれも後期を主体とする²。このようなどころからみると、都川谷奥には、後期以降に拠点的な集落が作られ、またその周辺に多数の小規模な遺跡が存在したようである。一方、平山町周辺や、現在広く造成の行われている東南部ニュータウンの付近では、長谷部貝塚・有吉北貝塚・有吉南貝塚など中期から大規模な貝塚が形成されている。

¹芳賀輪遺跡第1次・第7次、駒込遺跡、駒込南遺跡、宮ノ台遺跡

²野呂山田・川井両貝塚については、鹿島川水系に立地しているが、貝類の採取は都川水系に依存していたと考えられている。



第1図 菅田高田貝塚の位置と周辺遺跡 (1:50,000)

II 調査経過

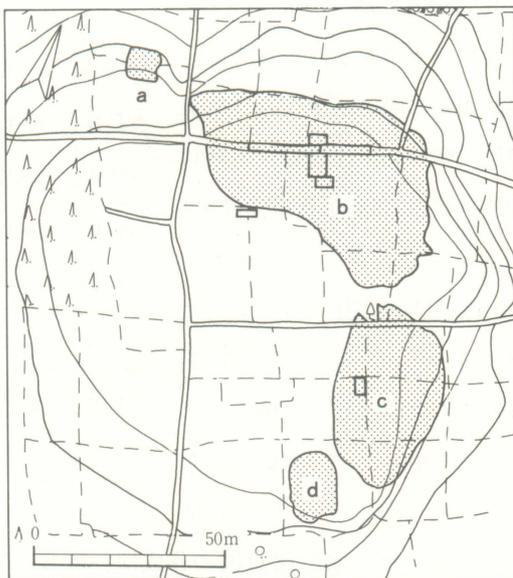
1. 調査経過

この確認調査は、千葉県教育委員会が実施している県内主要貝塚確認調査の一環として行われたもので、財団法人千葉県文化財センターが委託を受け、平成2年10月1日から同月31日にかけて調査を行った。

(1) 過去の調査(第2図)

本貝塚の存在は古くから知られていたようだが、何年頃に発見されたかについての詳しい資料は得られなかった。昭和20年代に関東地方の貝塚の研究が活発になる中で、海岸線から遠く離れていること、標高が50mほどもあることから、その立地が注目されるようになった。1947年には酒詰仲男が踏査を行い、重要性を再確認したようである。

これまでに発掘調査が2度行われているが、1度目の1949年に国学院大学・椎名仙卓氏が行ったといわれる合葬人骨の調査については



第2図 1954年の調査区 (1:2000)

未報告である。したがって、次に行われた1954年の学習院高等科史学部・同志社大学の合同調査の成果によって、はじめて本遺跡の内容が明らかになったのである。発掘調査は、大規模な貝層の中心部と、この時すでに知られていた人骨の集中地点にトレンチを設定して行われ(第2図)、翌年詳細に報告されている。その成果は、谷奥貝塚のもつ意味や性格を考える上で、貴重なデータとして常に取り上げられてきた。しかし、合葬された人骨群については重要な発掘例であったにも関わらず、考古学の研究者になじみの薄い雑誌に掲載された²ためか、あまり取り上げられずに現在に至っている。

(2) 調査経過

10月1日から始めた今回の調査では、遺跡の大部分が収穫前の畑地であり、調査の可能なごく限られた範囲にトレンチを設定した。そのため、必ずしも意図した位置を調査できたとはいえない。トレンチは合計7本で、第1トレンチであれば「1T」というように省略して呼称した。表土はすべて耕作土であり、どのトレンチでも20cmほど掘り下げると遺構検出面に達する

¹学習院高等科史学部1954『誉田高田貝塚』。第2図は報告書所収の図を改変したもの

²池田次郎1957「千葉県誉田高田貝塚出土の人骨について」人類学輯報18

ため、遺構の少ない1Tや4T・5Tの調査はすぐに終了してしまっただ。一方、貝層の内側に設定した4本のトレンチからは狭い範囲から多様な遺構・遺物が発見され、確認調査という性格からも、どこまで調査を行うか常に判断に苦しめられた。時間に追われた慌ただしい調査であったが、10月31日には埋め戻しを完了して確認調査を終了した。

2. 調査方法

トレンチの設定は任意に行い、地形測量の際に基準杭の公共座標値（昭和43年建設省告示第3059号の規定による第Ⅸ系座標系）を測定した（表1）。遺構ナンバーは、種別に関わらずトレンチ毎に通しナンバーとしている。本報告でも原則として現地でのナンバーを用いたが、変更したも

杭番号	X 座 標	Y 座 標	杭番号	X 座 標	Y 座 標
1T-N	-48847.506	34662.125	1T-S	-48854.674	34669.824
2T-W	-48891.168	34687.409	2T-E	-48883.986	34701.693
3T-W	-48873.676	34722.211	3T-E	-48864.702	34740.071
4T-W	-48851.143	34767.045	4T-E	-48842.174	34784.850
5T-N	-48935.485	34742.895	5T-S	-48953.361	34751.871
6T-W	-48924.435	34754.807	6T-E	-48921.888	34769.581
7T-W	-48877.716	34714.173			

表1 基準杭の座標値

のについては旧ナンバーを括弧内に示した。地形測量図の作成は、業者に委託して行ったが、貝層範囲の確認は、発掘調査と併行して実施したボーリング調査によった。ボーリングには長さ1mのステッキを用いた。未耕作の層はステッキの感触でも容易にわかるので、それ以下に貝殻があたるところをもって「貝層あり」と判断した。また、地形図には貝殻の散布する範囲も破線で示した。このようにして作製した地形図の成果品は1/500であるが、本書には1/1,000に縮めて掲載している。

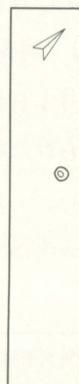
3. 各トレンチの状況

1 T（右カット、図版3）

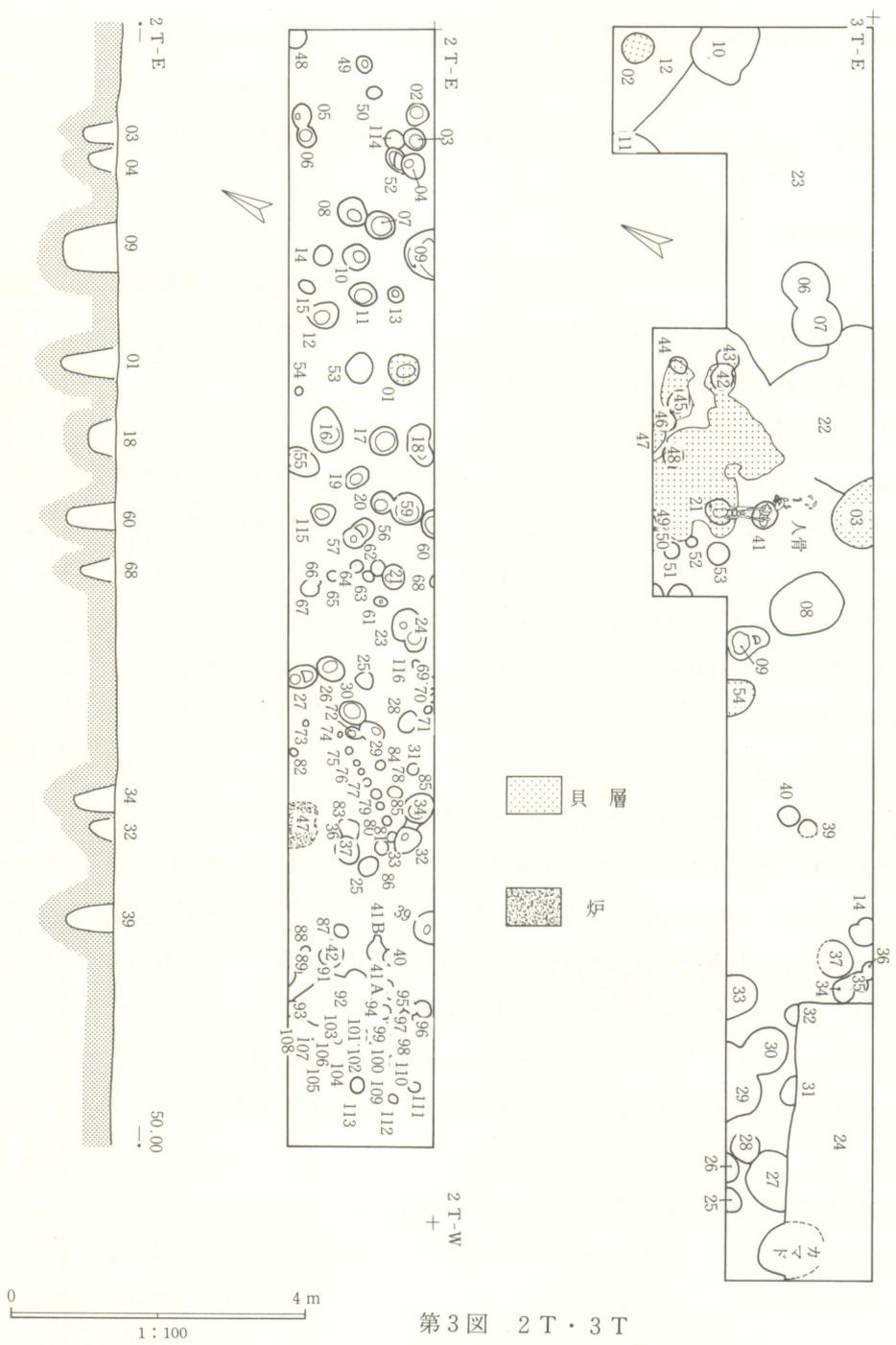
北側斜面の状況を知る目的で調査したが、作物の関係で、遺物散布の多い地点にはトレンチを設定できなかった。この場所は、先の報告で小規模な貝散布が示されている部分に近いが、貝は耕作土にもほとんど含まれていなかった。ピットが1基発見され、掘り下げたが遺物は検出できなかった。形状は縄文時代の遺構にともなう柱穴に似たものであった。表土からは加曾利B式土器の小破片約30点と時期不明の小片多数が発見されている。

2 T（第3図、図版3）

遺構検出面で、多数の落ち込みが発見された。耕作土に縄文後期の土器片が



1 T (1:200)



多量に含まれており、その時期の遺構群が展開していることをあらかじめ予想できたが、検出面の観察だけでは、落ち込みが遺構なのか、シミや根の痕なのか区別がつきにくかった。そのため一部を掘り下げて遺構か否かを検討した。

この結果、掘込みの形状や覆土の状態から、そのほとんどが縄文期の遺構に伴う柱穴と考えるに至った。このほか、径の小さなピットは壁柱穴、焼土の集積した047は炉跡の基底部であろう。このような状況から、壁や床の失われた住居跡が2T全面に広がっていた可能性が高い。ピット内からは、加曾利B期から安行期の土器が出土しており、表土から取り上げた分も含めて、これ以外の時期の土器は見られなかった。

3 T (第3図、図版4～6)

東半分は一面に遺構が検出された。01・12・23は住居跡と考えられ、それぞれ複数の軒数が切り合っていると思われる。03・06・07・08・10・11は形状や規模から小竪穴であろう。このうち、03には貝層を伴っていた。この他は住居跡の柱穴と思われるもので、02・09・54には貝層を伴っていた。発掘調査を行ったのは、これらのうち、01号住居跡およびそれに伴うピットの一部と獣骨の多数出土した3T-09である。

4 T (右カット)

遺跡の北東から入っている浅い谷に向かう緩斜面に直交するように設定したが、時期不明の土坑1基と土器小片が発見されたのみであった。土器片はすべて摩耗しており、流れ込んだものと考えられる。斜面下方では、縄文期に堆積したと思われる黒褐色土が見られたが、この層でも後期の土器小片を少量含んでいるにすぎなかった。地元の方の話でも、東側の緩斜面部は何箇所かトレンチャーによって掘り返されているが、小さな土器片しか出てこないという。貝層の分布が示す通り、廃棄行為は斜面の肩の部分を中心に行われたのであろう。

5 T (右カット図版6)

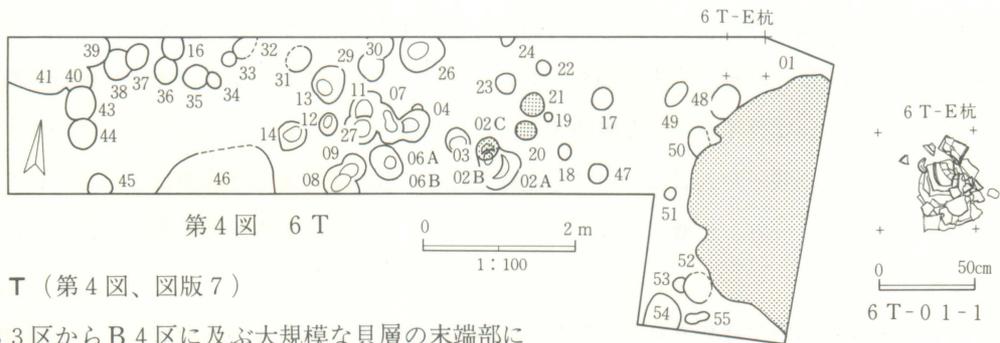
先の報告で地形図に貝散布が示されている地点であるが、表土にわずかな貝が含まれるのみであり、遺構も検出されなかった。耕作土は約20cmで、これを掘り下げるとソフトロームが露出した。しかし、その位置よりも標高の高い5Tでハードロームが検出されていたため、さらに掘り下げたところ、1mほど掘り下げても同様なソフトロームであった。地形図に現れている、南側の谷へ続く向斜面にかかっていることと関係がありそうだが、今のところ説明できない。表土からは晩期の土器がまとまって出土しており、本来は遺構や包含層が存在した可能性も含めて、今後地形の性格を解明していく必要がある。



4 T (1:200)



5 T (1:200)

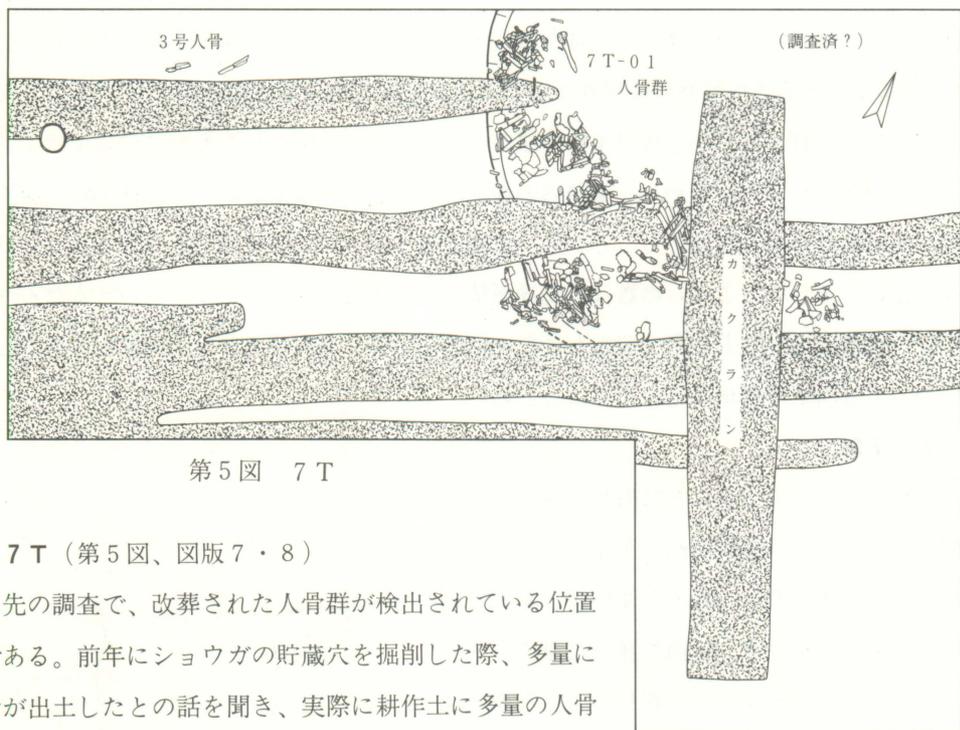


第4図 6T

6T (第4図、図版7)

B3区からB4区に及ぶ大規模な貝層の末端部

あたり、予想通り貝層が検出された。しかし、形状から住居跡の覆土内貝層と推定され、大規模貝層の性格は究明できなかった¹。トレンチ内からは多数のピットが検出され、一部について半分掘り下げて土層観察を行ったところ、縄文期の遺構に伴う柱穴と考えられた。2T同様に、トレンチ全体に住居跡が展開していた可能性が高い。土器は、加曾利B1式が主体である。



第5図 7T

7T (第5図、図版7・8)

先の調査で、改葬された人骨群が検出されている位置である。前年にショウガの貯蔵穴を掘削した際、多量に骨が出土したとの話を聞き、実際に耕作土に多量の人骨が混じっていたため、攪乱された部分の骨の回収や残存状況の確認を目的としてトレンチを設定した。

多量の人骨片を含む表土を除去すると、ショウガ穴の他にやはり最近の耕作によると思われる4条の溝と、トレンチ北東部に人骨の混じらない部分が現れた。原位置を保っている人骨は

¹先の調査でC地点に設定されたトレンチでは、20~30cmの堀之内期の貝層が検出され、貝層下に12~34cmの黒褐色土層が認められているが、詳細は不明である。

これらによって攪乱され、ごく限られた範囲にしか残っていなかった。北東側の人骨が検出されなかった部分は、おそらく先の調査のトレンチであろう。また、ショウガ穴の部分で断面を観察したところ、プライマリーな層は5cmほどしか残っていないようであった。このような状況から、わずかに残った人骨についても記録を行って取り上げてしまったほうがよいのではないかと判断した。一方、土壌の壁近くでは、そこまで10cm以上残存しており、多数の人骨が出土した。

なお、墓壇の西側で埋葬されたとされると思われる保存状態の悪い人骨1体を検出したが、掘り込みなどは確認できず、この他にも遺構は見られなかった。

III 検 出 遺 構

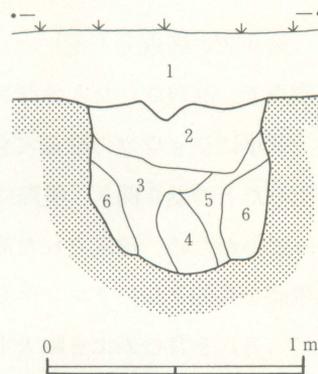
今回の調査で確認された遺構には、縄文時代の住居跡5軒以上、土壌墓1基、土坑11基、ピット約200基及び古墳時代後期の住居跡1軒がある。ピットの多くは住居跡に伴うと考えられるが、住居跡が何軒あるのかを検討する方法がない。また、土坑としたものについては、性格を明らかにできなかった。しかし、遺跡内の畑地に散布している土器が、ほぼ縄文時代後期から晩期前半のものに限られていることから、遺構のほとんどがこの時期のものであることはほぼ間違いない。そして、これらの数は、発掘面積から考えればきわめて多いといえるだろう。ここでは、遺構の内容がある程度明らかになったものに限って取り上げ、上面検出で終了した遺構については前章で簡単に紹介するにとどめた。

2 Tピット群

検出されたピットのほとんどは掘り込みが円筒形で、壁は垂直に近く、底に凹凸の少ないものである。覆土は比較的しまりを欠くものが多いが、表土のように灰色を帯びたり、鎌で断面を搔いた際にシャリシャリ音を立てたりせず、ごく新しいイモ穴等とは明らかに区別できる。また、底が不整形で比較的堆積の密な、根の痕跡と思われるものがいくつかみられたが、これらとも識別できる。

09は、径80cmの土坑であり、加曽利B式後半～安行1式の土器が出土している。覆土は、1. 耕作土。

2. 暗黄褐色土(汚れローム主体、やや密でしまる)。3. 暗黄褐色土(しまり欠く)。4. 暗褐色土(ローム粒多量に含み、しまり欠く)5. 黄暗褐色土(暗褐色土と汚れロームの混じり)。



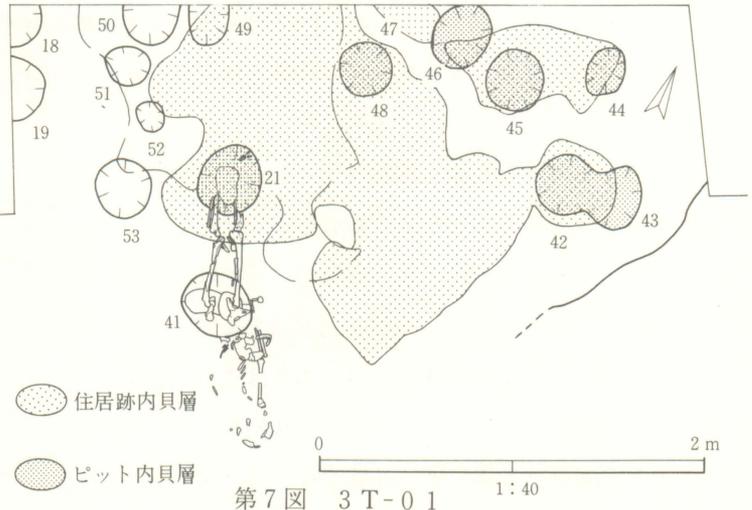
第6図 2 T-09

6. 黄褐色土（ローム粒主体に、ロームブロック多く含まれる、ややしまる）となっており、層界は漸移的であった。

3 T-0 1 住居跡

覆土内貝層、ピット内貝層と埋葬人骨を伴う加曾利B期の住居跡であり、複数の切り合いが見られた。

調査 トレンチに貝層が検出された時点で、広がりを見るために一部拡張して調査を行った。6T-01とともに形状から住居跡内の貝層であろうとあらかじめ予想できたが、

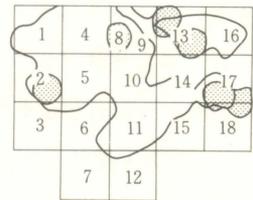


第7図 3 T-0 1 1:40

どちらか一方でもそれを確認しておく必要があると考え、こちら側の貝層を掘り下げることにした。その結果、柱穴と床面によって住居跡を確認することができた。貼床の下にはさらに古い時期の遺構が確認できたが、掘り下げるには至らず、遺構の性格を知ることはできなかった。

時期 出土した土器は、堀之内2式~加曾利B1式のものが比較的まとまって出土しており、該期の遺構である可能性が高い。

遺構 (第7図) 踏みしめられた床硬化面とわずかに認められた壁によって住居跡と判明したが、規模・プラン等は不明である。柱穴は多数検出されたが、配列は不明であり、少なくとも3段階以上の重複または建て替えがあったと思われる。すなわち、埋葬人骨と床面によって認められる住居に伴うもの(21)、明らかに古いもの(41)、新しいもの(48)である。48のピット内貝層は覆土内貝層を切っており、人骨や貝層上に貼り床を持つ住居があった可能性が高い。これ以外のピットは、



第8図 貝サンプル採取位置 (1:80)

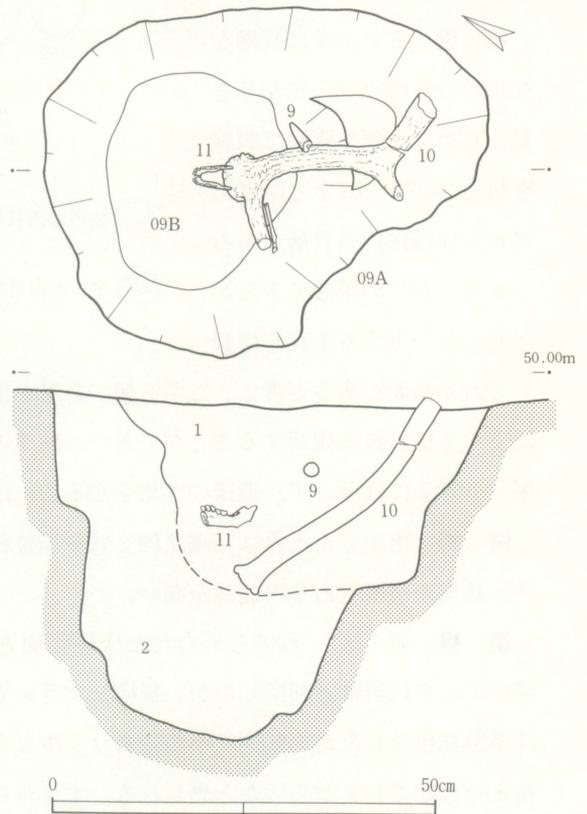
貝層 (第7図、図版4) 調査を行ったのは、床面から若干浮いた位置に堆積した覆土内貝層である。表土下20cmで貝層上面が検出され、厚さ10cmほどが残っていた。上面はかなり削られている可能性が高いが、耕作による攪乱は精査した面には全くといって良いほど及んでいなかった。貝層下はローム主体の暗黄褐色土層が薄く堆積していたが、ほとんど床面近くに堆積した貝層として良いと思われる。サンプリングは、貝層が薄かったので、全体に50cmのメッシュをかけて区切られたブロック毎にすべて採取した(第8図)。貝層および貝層下には多量

の動物骨が含まれており、とくにシカの各部位が集中して廃棄されていた。このほか、イノシシ・アカネズミ・サルが見られる。残念ながら、貝類を除くと動物遺存体の分析は未了であり、今回は次章に種名を報告するにとどまった。

埋葬人骨 (第22図、図版5) 1・2号人骨は、本住居の廃絶後に埋葬された、いわゆる廃屋墓に伴う可能性が高く、成人・幼児各1体が合葬されている。これについては、次章に詳しく述べたい。

3T-09 (第10図、図版5・6)

鹿角・ニホンサル幼獣の下顎骨などが発見されたピットである。鹿角は落角で、上部は耕作によって失われているが、完形のまま埋められていた可能性が高い。サルの骨は先の調査でも発見されており、県下でも後期貝塚に比較的出土例が多いが、幼獣の検出例は少ないようである¹。本遺構から発見された下顎骨は食用に捕獲されたとは考えにくいほど幼い個体のものである。覆土は、1. 黒褐色土(汚れロームとの混じり、よく混じりあっているが、粒子は識別できる。破碎貝を少量含む) 2. 黄暗褐色土(ローム主体だが、1層に似る。貝の混入はきわめて少ない)に分層できた。この層界は掘り込みの段と連続しているため、2基のピットの重複と考えるに至り、09A・09Bと呼称した。09Aは獣骨の入っていた30×50cm深さ24cmのピットで、09Bを切っ



第9図 3T-09 (1:10)

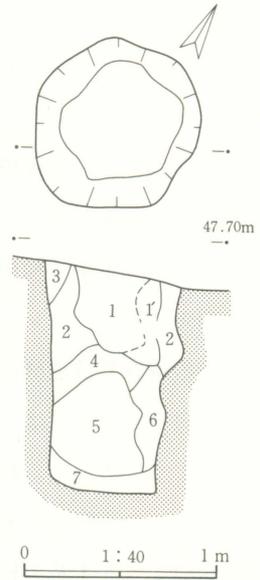
ており、動物骨を遺棄するために掘られた(または転用された)特殊な遺構の可能性もあろう。性格の解明は類例の検討など今後の研究に委ねたい。

なお、貝の入り方はランダムでほとんどが汚れた破碎貝であった。おそらく土とともに埋まった二次堆積によるものであろう。覆土の半分はサンプリングしており、最少個体数でイボキサゴ847個、ハマグリ34個、マガキ23個、アサリ3個、ツメタガイ・アカニシ・アラムシロ・オキシジミ・シオフキ各1個が含まれていた。獣骨、魚骨も含まれていたが、分析は未了であり、結果は次の機会に報告したい。

¹有吉北貝塚でもサル幼獣が発見されており、うち1例は埋葬されていた(未報告)。

4 T-0 1 (第10図)

検出面で径約0.9m、深さ1.1mの遺構であるが、伴出遺物が無く時期・性格とも不明である。形状は後期の小竪穴に似ている。付近の耕作土に多量に流れ込んでいる土器片が、本遺構内には入っていなかったことは、縄文期以前の遺構であることをものごとっているであろう。覆土は均質な1層と、やや非均質な2層以下に分けられ、ともにしまっている。1. 黒褐色土(暗褐色土を淡い斑状に含む)。2. 黄黒褐色土。3. 暗黄褐色土(ローム集積)。4. 黄黒褐色土(黒色土とローム粒の混じり)。5. 黒色土。6. くすんだ黄褐色土(よごれローム集積)。7. 黄黒褐色土。各層界は不明瞭で、一時期の埋め戻しは考えにくい。1層は縄文期の落とし穴の最上階によく似た無構造な堆積で、自然堆積の特徴をよく示している。2層以下についてもロームと黒色土の比率の変化が漸移的であり、自然的といえる。



第10図 4 T-0 1

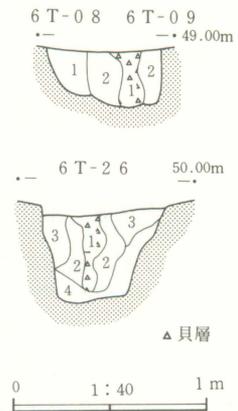
6 T-0 1 (第4図、図版7)

検出した貝層は、トレンチ側のボーリングにより、3×3.5mの略円形であることが判明した。輪郭はきれいなカーブを描いており、住居跡内の覆土内貝層であろう。ただし、今回は住居跡の施設などは一切検出できなかった。貝層の外側はローム面が露出したにもかかわらず、柱穴が見られなかった。貝は圧倒的にイボキサゴが多く、ハマグリが混じるが、この2種以外の貝はきわめて少なかった。薄い灰層の存在などにより、本来は数度の廃棄によるものであろうが、貝の種構成や大きさは、均一的であった。今回は貝層上面の精査とその面での土器の取り上げを行った後、埋め戻した。なお、この他に打製石斧1点を伴っていた。第12図に示した土器(6T-01-1)は貝層の北側で発見されており、他の住居跡が床面を失っていることからすれば、本遺構に伴うものとみられる。

6 Tピット群(第4・11図、図版6・7)

6Tから検出された50基以上のピットの内、掘り下げたのは14基である。ここでは、柱痕跡またはその抜き取り痕と思われる土層が観察されたものについて取り上げたい。08・09は切り合っており、土層の観察によれば09の方が新しいが、発見された土器の内容からは判断できなかった。09の土層は、1. 黒色土(破碎貝を含む。堆積疎)。2. 黒褐色土(ローム粒を多く含む)で、08は、黄暗褐色土(黒褐色土とローム粒の混じり。焼土粒少量含み、密)の単層であった。色調や堆積の疎密から2基の切り合いは明瞭であった。

26は柱穴とすれば大きめのもので、黒褐色土主体の1・2層と、ロー



第11図

6 T-0 8-0 9-2 6

ムを多く含む3・4層に分けることができた。1. 黒褐色土(破碎貝を含み、*きわめて疎)。2. 黒褐色土(ローム粒少量混じるが、均質的)。3. 暗褐色土(ローム粒やや多く含み、密でしまる)。4. 暗褐色土(ローム粒・ブロックと暗褐色土による非均質層、やや疎だがしまる)。

09と26は、ともに柱の痕跡と思われる土層がみられる。それは、破碎貝を含み、黒味の強い堆積の疎な土層であり、ピットの中央にはいつている。貝は破碎されているだけでなく、堆積がランダムで、一次堆積の貝層とは明らかに区別できるものであった。

7T-01 (第5図, 図版7・8)

トレンチの東半で検出された、多数個体の二次埋葬墓である。1949年、1954年に続いて3度目の調査になり、トレンチ北側にさらに続いていると思われる。

過去の調査では遺構の形状についての知見は得られなかったようであり、今回初めて壁の一部を検出できた。壁はトレンチの北壁から1.5mほど直線的に伸び、不明確ながらも東へ屈曲しているようであった。最も残りの良い部分で20cmほどの高さがあり、ほぼ垂直に立ち上がっている。底はやや凹凸があり、硬化はみられなかった。なお、壁から70~80cmほど離れた部分で柱穴様のピット1基を検出したが、残念ながら記録を忘れてしまった。

人骨は1/5で実測してから取り上げていった。プライマリーな層は土より骨の方が多く、断面などの細かい観察は不可能であったが、取り上げ終了までには多くの時間を費やした。しかし、残念ながら、排土をフルイにかけるといったことは実施できず、骨の回収は不完全である。再び埋め戻してしまった小片も多いと思われる。

ところで、人骨群は今回調査したトレンチ北側の農道部分にも連続しており、未攪乱層が残っている可能性が高い。一方、1954年調査地点の東側はすでに発掘されて¹層位が乱れていたという。墓壙の規模を検討する材料はこれらの記録をおいてはないが、長さ数メートルにおよぶ大きな墓壙であった可能性が高い。埋葬状態や人骨についてはV章に記載した。

IV 出土遺物

今回の調査で掘り下げた縄文時代の遺物包含層は、ピット約50基の覆土と、住居跡1軒の厚さ10cmほどの覆土のみであり、得られた遺物の大半はトレンチ一括で取り上げた土器片であった。したがって、ここで取り上げる土器や石器の内容は、縄文後期の拠点集落の調査としては貧弱である。しかし、これは上述の理由によるものであり、むしろ、この小規模な調査によっても、動物依存体やそれに関するデータが多量に得られることを改めて思い知らされた。

¹1949年稚名仙卓氏によって行われたというもの。

1. 土器

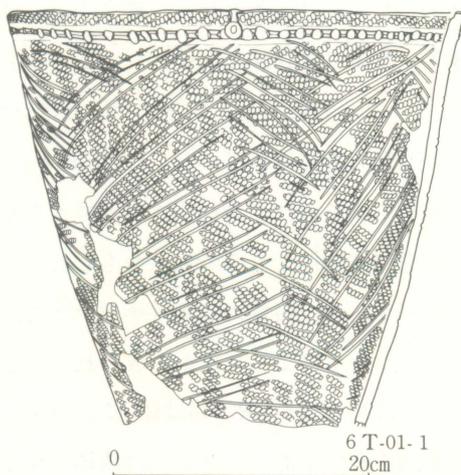
発見された土器の出土量は整理箱15箱で、そのうち縄文時代の層から出土したものはわずか1箱であった。時期的には、数点の中期・加曾利E式土器と若干の近世後期以降の陶磁器を除けば、すべて縄文後・晩期のものであった。まず、時期的な出土傾向をまとめてみたい。

- 加曾利E式** 先の調査と合わせても数点出土しているにすぎない。
- 堀之内式** 先の調査ではこの時期の貝層を調査しており、最も多く出土しているが、今回はわずかな数であった。
- 加曾利B式** 最も多く出土した。遺構に伴ったものも多かった。
- 曾谷式** 筆者の認識不足のため、前後の型式と区別できなかったが、多く含まれていると思われる。
- 安行I・II式** 加曾利B式について多く出土した。
- 安行III・姥山式** 量としては多くないが、5Tで出土した土器の大半がこの時期のものであったことは、注目される。
- 大洞系の土器** 1点出土したのみであった。

(1) 遺構出土土器

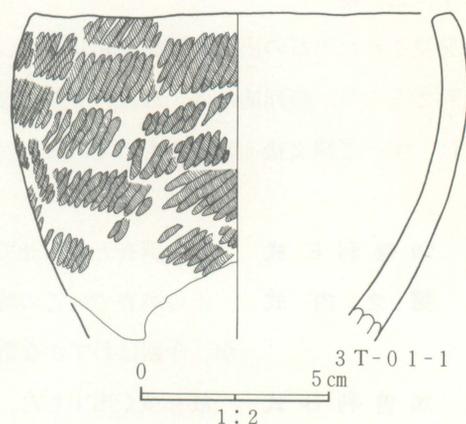
6T-01-1 (第12図、図版7・9) 加曾利B1期の粗製深鉢である。前章で触れたように6T-01住居跡に伴うものと考えられる。ほとんどの破片は、内面を上にして、折り重なって出土した。胴下半部については同一個体と思われる破片もなかった。

器形は口縁まで直線的に開くもので、口唇部で、最大径36cmを測る。残存高は32.5cmであった。口唇は、上端をミガキによって平坦に作り、内側には段を形成している。紐線は口唇から1.5cmの高さにあり、両側をナデツケによって断面三角形の微隆帯を作り、上に比較的間隔をおいた指頭押圧を加えている。紐線と口唇を連結する貼付文は3単位であるが、割付は均等ではない。縄文は、LRを口縁近くでヨコ、胴部でタテに施文し、その上に半截竹管による平行沈線を引いている。内面の調整は、上半が粗いヨコミガキ、下半はタテのナデツケ。



第12図 遺構出土土器(1)

3T-01-1 (第13図、図版9) 3T-01住居跡から出土した小形の鉢である。口径は11cm、最大径は胴上半で12cmを測る。残存高9cmで、本来の器高は口径に近いものであったと思われる。口唇部の作りは丁寧なヨコミガキによって行われ、やや内側に傾斜した平坦な面を形成している。文様は、無節Lがヨコに施される。図示した面は、施文単位が分かりやすい部分であり、他の面ではもう少し密に施文している。内面調整は、強いヨコミガキである。



第13図 遺構出土土器(2)

2T-01 (第14図、図版10) 加曾利B3式から曾谷式期のものと思われる。1・2はミガキに近い浅い条線を施した粗製土器で、1は頸部に無文帯をもつものであろう。2は口唇直下に紐線をもつ。3は帯縄文をもった精製土器の胴部であるが、全体の文様を復元できない。安行1式にみられるミガキ残しによる隆帯の成形技法は用いられていない。器面調整は、帯縄文の上がヨコミガキであるのに対して、下ではナナメの粗いミガキで、条痕の表現に近い。

2T-09 (第14図、図版10) 出土した土器は加曾利B式後半から安行1式までの幅をもつようであり、遺構の時期を特定できない。4は頸部に紐線をもつ粗製深鉢で、ミガキに近い浅い条線が頸より上でヨコ、下でナナメに施されている。5は口縁に無文帯と沈線をもつものであり、加曾利E式末葉の土器にも似るが、破片の下端にヨコ方向の沈線がわずかに確認できるので、加曾利E式後半の土器と考える。縄文はRLヨコ施文である。6は無文部を強く磨いて帯縄文を形成したもので、安行1式であろう。

図示した他には、条痕16点、縄文4点、縄文上に沈線を引いたもの3点などが出土している。

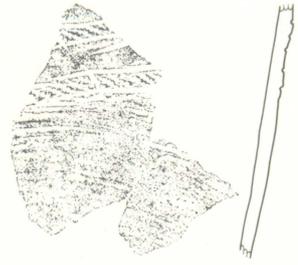
3T-01 (第14図、図版10) 3T-01住居跡から出土した破片資料をまとめた。これらの中で、8・10・11はピット内出土で、12は貝サンプル中より発見されたものである。また、13・14は1・2号人骨に伴っていた。9は床面下一括として取り上げられているものの、1点のみ混じった安行1式であり、流れ込んだと考えざるを得ない。8・14は紐線を伴わない粗製土器であり、堀之内式に伴うものであるかもしれない。11も堀之内式であろう。10は高い紐線をもった粗製土器である。紐線の両側はナデツケられず、間隔の開いた指押圧がなされている。口唇の内側はヨコナデによって段が形成されている。11・14は半截竹管による平行沈線を施文する。縄文原体は10・11がLR、14はRLで、いずれも横位に押捺している。12は広い口縁部無文帯の下に屈曲をもつ土器で、鉢または浅鉢になるであろう。LRヨコ施文の上に沈線が引かれている。11・12・14は口唇上端が平坦に磨かれている。13は波状口縁の深鉢の波頂部で、径2mmほどの断面円形の棒状工具によって、沈線、刺突文が描かれている。



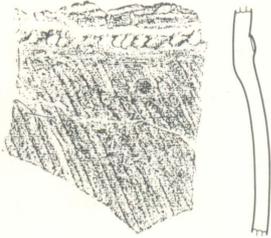
1
(2T-01)



2
(2T-01)



3
(2T-01)



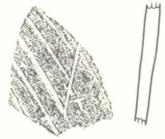
4
(2T-09)



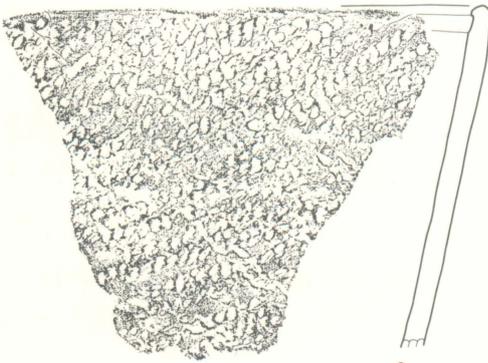
5
(2T-09)



6
(2T-09)



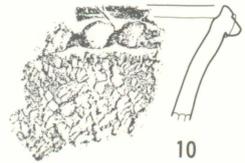
7
(2T-09)



8
(3T-01)



9
(3T-01)



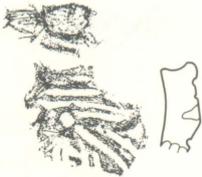
10
(3T-01)



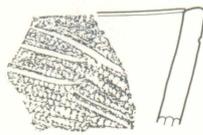
11
(3T-01)



12
(3T-01)



13
(3T-01)



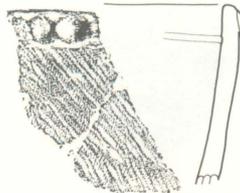
14
(3T-01)



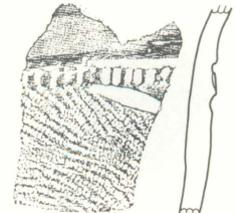
15
(3T-09)



16
(6T-01)



17
(6T-01)



18
(6T-01)

0 10cm

1 : 3

第14图 遺構出土土器 (3)

3T-09 (第14図、図版10) 15は加曽利B1式の精製深鉢であろう。他には加曽利B式と
思われる破片3点と、時期不明の土器3点が出土している。

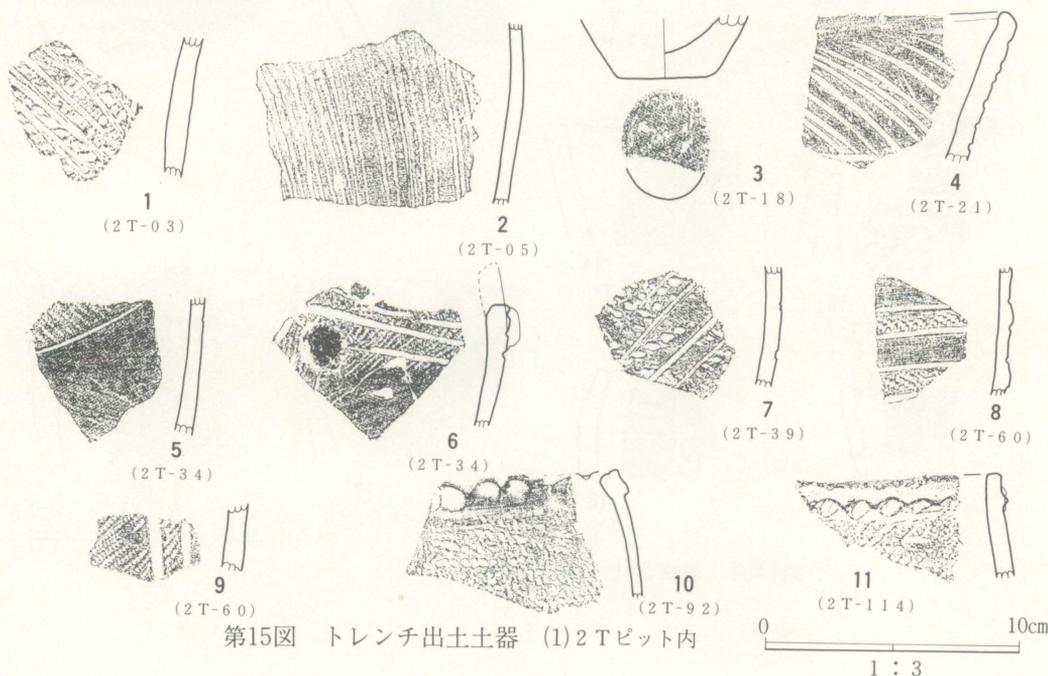
6T-01 住居跡内に堆積していたと考えられる貝層に伴う土器である。16・17および
6T-01-1 (第12図) は加曽利B1式に、18はB2式に比定されよう。貝層は掘り下げておらず、
3点とも貝層検出面から取り上げたものであるため、その堆積時期は特定できない。①加曽利
B1期の住居跡にB2式が紛れ込んだ。②B1期の住居跡をB2期の貝層をもった住居跡が切っ
て、というおおよそ2通りの解釈が可能であろう。

16は平行沈線間に縄文を充填し、「い」の字状の文様を加えた精製土器。17は口唇直下に紐線
文をもつ粗製土器で、口縁は直線状に開く。縄文は多条のRLが用いられている。内面は強い
ミガキが施されるが、さらに1本の深いミガキの線が沈線状に横位に引かれている。18は頸部
に大きめの刻みをもち、太い沈線によって弧線文が描かれる。縄文はRLヨコまたはナナメ。

(2) トレンチ出土土器

2Tピット内出土土器 (第15図、図版11) 2T出土の土器の内、図示したのは、すべてピッ
ト内から出土したものである。なお、一括で取り上げられたものの内容は、加曽利B式~安行
1式を主体とした小片約160点であった。

1は2T-03から出土したもので、加曽利B式の粗製土器である。幅9mm強の半截竹管によ
る条線が直線的に描かれている。2は2T-05出土。やや粗いナナメミガキの後にミガキに近い
条痕を施す。3は砲弾形の深鉢の底部である。底面が楕円形である。4は2T-21から出土した。
1本ずつ引いた条線を消すように頸部に横位の沈線を施文しており、以下に無文帯をもってい

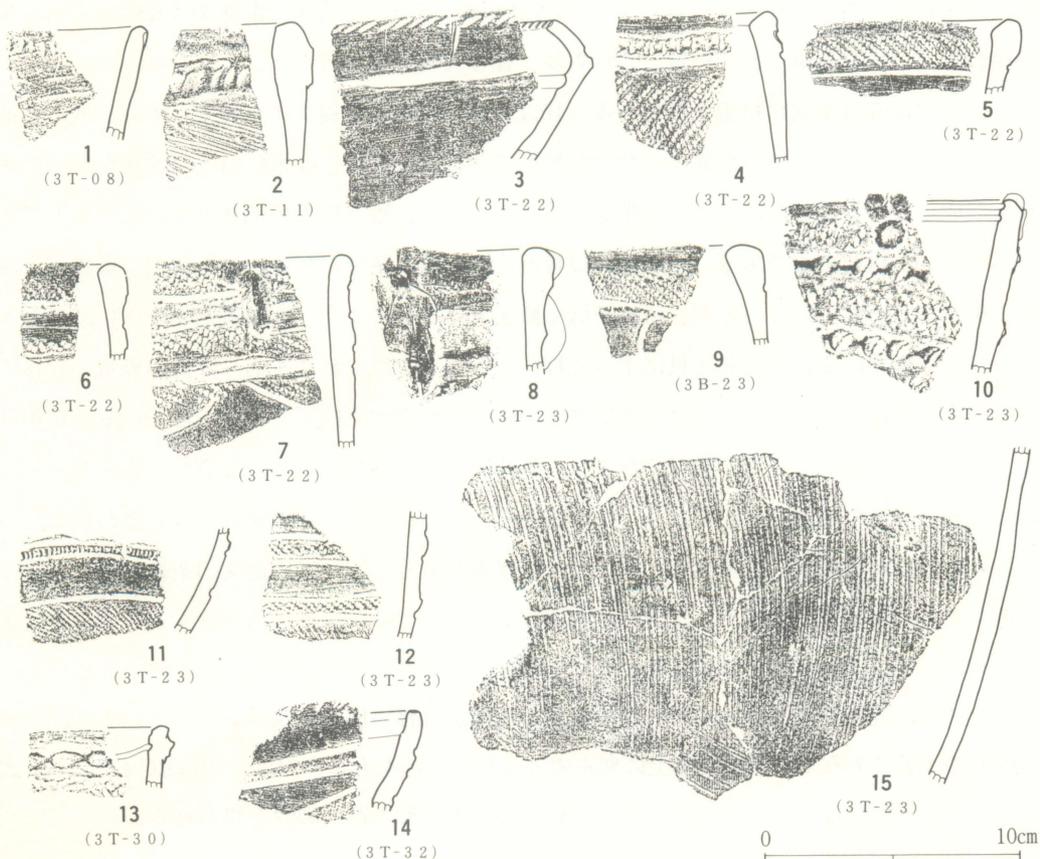


第15図 トレンチ出土土器 (1) 2Tピット内

たと思われる。5・6は2T-34から出土しており、ともに曾谷式の特徴を示している。

5は連続した弧状沈線間に縄文を埋めるもの。6は波状口縁の土器で、RLヨコ施文上に3条の沈線を引き、円形の瘤状突起を貼付けている。その後に、縄文の下端に及ぶヨコミガキがなされるが、どこまで磨消すかがはっきりしていない。明確な帯縄文を形成する安行1式とは異なった点であろう。7は2T-39から出土した加曾利B式、8は2T-60の安行1式である。9はRLヨコ施文、内面はナデツケの破片で、加曾利E式または堀之内1式であろう。10は2T-92出土の粗製土器。口唇直下の断面三角形の紐線、粗い縄文、口縁の内彎する器形などから、加曾利B1式であろう。口唇上端以外はヨコナデによって仕上げられている点は、この時期のものとしては少ない方であろう。11は2T-114から出土した。口縁の形状から、図のような傾きに復元したが、器形はよくわからない。口縁の内側には、沈線が引かれ、後にヨコミガキによって消されかかっている。これは第16図13と共通するものである。その意図は図りかねるが、第14図17などと合わせて考えると、あるいは加曾利B1期にある程度特徴的に出現するものかも知れない。

3 Tピット内出土土器 (第16図、図版11) 1は3T-08出土。口縁の連続刺突は先端の角張った工具によって施されており、あるいは、半截竹管によるものかも知れない。2は3T-11出土で、安行2式の粗製土器であろう。口唇の作りは比較的雑で分厚い。内側には、ケズリによ

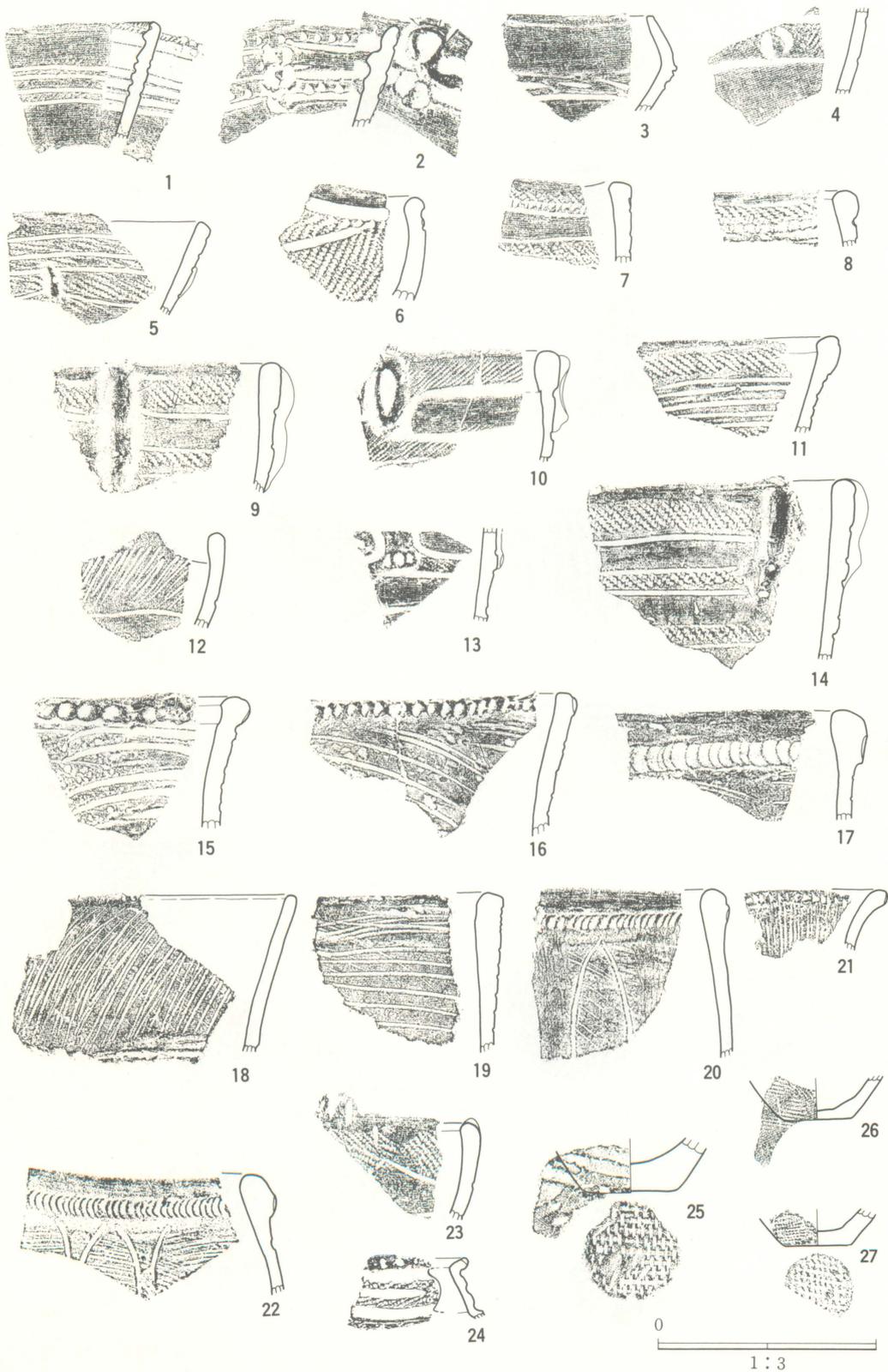


第16図 トレンチ出土土器 (2) 3 Tピット内

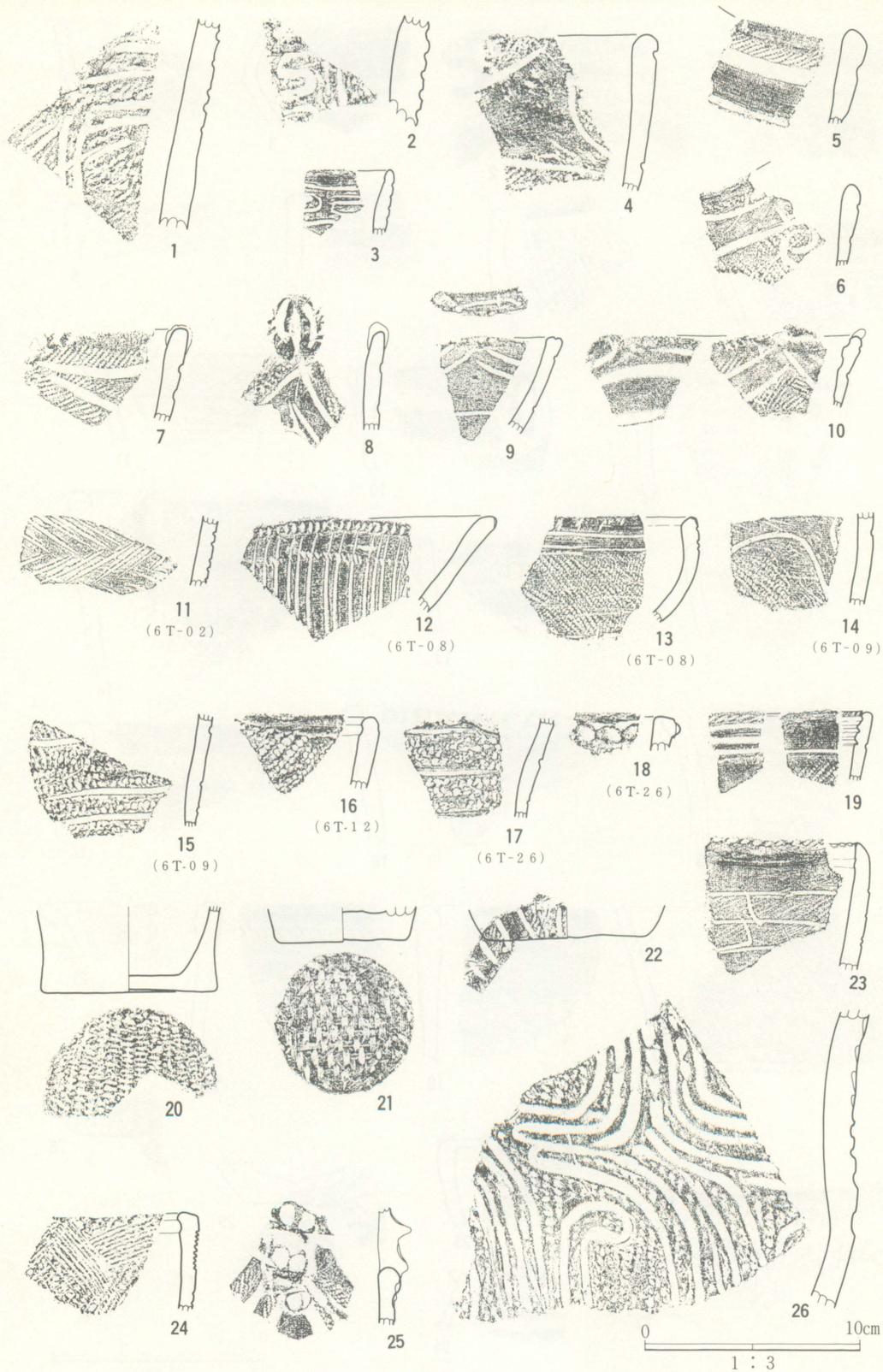
って稜ができています。3～6は3T-22から出土した。遺構は小竪穴の可能性が高く、加曾利Bの住居跡(3T-01)を切っており、加曾利B式土器は流れ込みと考えられる。4・5は安行1式の帯縄文の土器である。6は帯縄文間にヨコミガキがなされず、瘤状突起が帯縄文の間に付くことから、やや古いものであろう。3T-23は、トレンチ東側の全体にかかっている大きな落ち込みに付けたナンバーであり、遺構の性格は不明である。安行1式(8・12)と加曾利B式(10・11)が混在していることから複数の遺構が重複しているのであろう。8は、帯縄文が後から削られており、瘤状の突起も上下別に貼付されて軸がずれている。12は胴部に条痕が施文される。15は上から条線がタテに引かれた後、下からナナメの条線が加えられている。13は3T-30から出土したもので、内側の沈線や、紐線の形状は第15図11と共通している。14は2T-32から出土した。口唇上に刻みをもつもので、加曾利B式であろう。

3T一括土器(第17図、図版12) 加曾利B式から大洞系の土器までであるが、ほとんどは3T-01住居跡周辺で出土した加曾利B式と、3T-24(古墳時代住居跡)から一括して出土した安行1～2式土器である。加曾利B式としては、B1式の精製土器(1・2・4)がやや目立っている。6・12・21は加曾利B式後半の土器であろう。5は口縁端部まで施され、3条の沈線が引かれる。その下に弧状沈線が施文され、小さな瘤状突起が貼付されている。7・8はいずれも帯縄文の下端に連続刺突が加えられたものであり、7は波状口縁であろう。なお、帯縄文は隆起しておらず、沈線のみによって表現されている。これらは、曾谷式の特徴であろう。

9・11・14は安行1式の精製土器である。10は分厚い口縁の帯縄文の土器で、安行1式と共通する特徴をもつが、いくつか異なった点が観察できた。それは、隆帯に沿った沈線が杵状の区画を形成していることをはじめ、隆帯が平坦であること、胎土に黒色鉱物を含むことなどである。15～22は粗製土器である。15・16は口唇直下に紐線が貼付られる。ともに太い条線が弧状に1本ずつ引かれていることや、紐線が低く断面丸いことにより、加曾利B2期のものであろう。16では指頭に変えて篋状工具によって押圧文が施文されており、刻みに近い表現になっている。また、紐線の直下と2cmほど下にタテの弱い爪形文が連続して付けられている。拓本では2段目のものがかろうじて識別できよう。等間隔で施文されており、意識的なものであろう。18は紐線を失った時期のものであり、曾谷式であろう。17・20・22は安行2式と思われる。いずれも口唇部が肥厚し、若干下がったところに紐線がある。20・22は地文の条線を引いた後に、紐線文の隆帯下端をヨコナデし、鋭い弧状沈線文を描いてから、条線の一部をタテミガキによって磨消している。また、口唇は20がヨコミガキ、22はヨコナデによって丸く仕上げている。17はケズリに近いヨコミガキによって紐線文の上端が口唇の作りに取り込まれている。23・24は晩期の土器であろう。23は口唇上に刻みの入った小突起をもつ。24は、大洞BCまたはC1式であろう。頸部には透かしが入っており、釣手形か香炉形土器の破片と思われる。



第17図 トレンチ出土土器 (3) 3T-括



第18図 トレンチ出土土器 (4) 4T・5T・6T・D4区具層一括

25～27は底部破片を集めた。25は外面は無文で、粗くナデツケされている。26・27は細かい縄文が下端にまで及んでいる。25・27は底に網代痕を有し、いずれも1本送りで、経1本超え・2本潜り、緯2本超え・1本潜りであると思われる。

4 T一括土器（第18図、図版13） このトレンチで発見された土器は摩滅の著しい小片ばかりであったが、圧倒的に堀之内式が多かった。図示したものは、堀之内1式2点と型式不明の土器1点である。1は無節Lの地文上に、タテ・ヨコに沈線が引かれている。2は縄文原体が不明。蕨手上の沈線を垂下させている。

5 T一括土器（第18図、図版13） 遺構が全く検出されなかったが、発見された土器が加曾利B式数点の他は晩期のものばかりであり、注目された。すべて、晩期前半の土器であろう。5・6・8は波状口縁で、他は平縁である。10は姥山2式、9は姥山3式に比定されよう。7は前浦式であろう。

6 Tピット内出土土器（第18図、図版13） 11は6T-02出土で、加曾利B2期に特徴的な鋭い沈線による綾杉文が描かれる。6T-08からは、12・13が出土した。12は2段に刻み列が描かれる。13も口唇直下に刻みがあり、残存部下端には横位の沈線が引かれている。加曾利B3式であろうか。14・15は6T-09、16は6T-12、17・18は6T-26から発見されたもので、加曾利B式、細分はできない。

6 T一括土器（第18図、図版13） 19・23は加曾利B1式である。22は胴下端まで垂下する沈線と縄文が施文されており、中期末葉のものであろうか。24は9本1組の櫛描沈線の施文されたもので、堀之内式から、加曾利B式まで考えられる。25は帯縄文の繋ぎ目にブタ鼻状の貼付がされている安行3a式である。

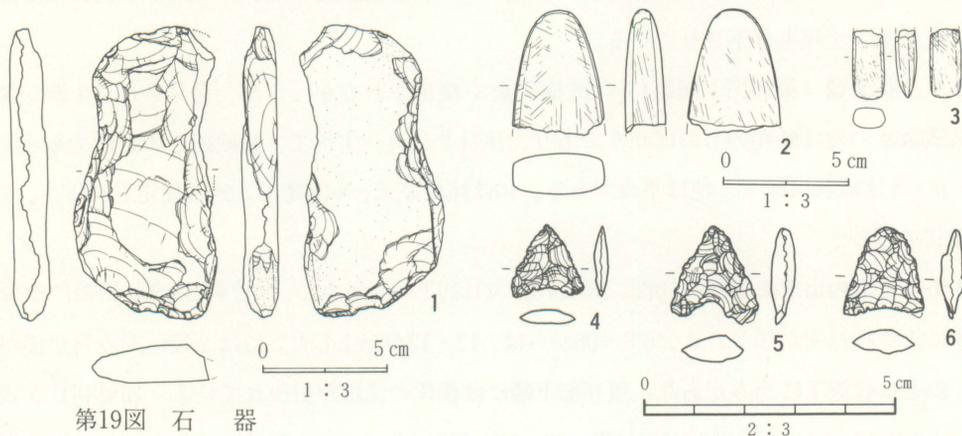
D 4 区貝層（第18図、図版13） 26はボーリング調査によって発見された貝層にともなうもので、タヌキ掘りされてしまったものである。LRナナメ・タテ施文上に、太く浅い沈線によって幾何学文が描かれる。一部では連続刺突になっており、沈線とともに、竹管状工具によって施文されている。

以上の報告の中では、色調や胎土について全く触れなかったのが、ここで気付いた点を若干述べておきたい。色調については、土器表面の観察でもある程度の傾向は指摘できるであろうが、むしろ断面の観察によって時期的な差がつかめるように思われた。例えば、加曾利B式の精製土器の多くは、器表の色にかかわらず断面が黒い。混入物は少ないか、あるいは観察しにくい状態になっているようである。これに対し、加曾利B式の粗製土器や、精製土器でも曾谷式以降のものは混入物が比較的多く、安行式は赤みを帯びたものが多いようである。また、ごく限られたものに黒色の鉱物が見られた（第17図10、第18図5）。長さ1mm未満、幅0.3mm程度の角柱状のものが多いようである。

2. 石器・骨角器・土製品

(1) 石器 (第19図、図版14)

今回の調査で発見された石器の数は少なく、縄文期の遺構に伴うものは1点のみである。しかし、遺跡内の畑にはかなり多くの石片が見られたので、石器が少なかったという印象はない。むしろ、チャートの剥片を中心として、石器類の散布は多かったように思われた。なお、採集されたものには、図示したもの外に石剣片1、石皿片1、磨石類の破片数点がある。



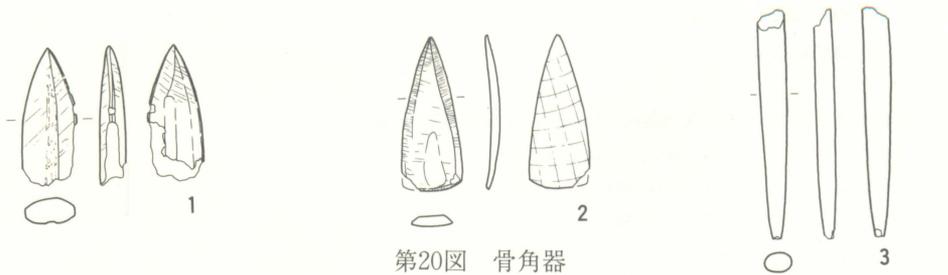
第19図 石器

No.	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	出土位置
1	打製石斧	11cm 5mm	5cm 6mm	1cm 3mm	122.9g	硬砂岩	6T-01
2	磨製石斧	(5.0)	(3.7)	1.6	47.2	蛇紋岩	表採
3	磨製石斧	(2.7)	1.3	0.8	4.8	チャート	表採
4	石鎌	1.4	1.4	1.3	0.4	チャート	表採
5	石鎌	1.9	1.8	0.5	1.0	黒曜石	4 T
6	石鎌	1.7	1.6	0.5	1.1	チャート	表採

表2 石器計測値

石斧類 1は6T-01-1土器とともに発見された打製石斧である。片面に自然面、もう一方に摂理面を残す。縁辺からの剥離は浅く、とくに両側縁では潰すような加工が行われている。形状は不整形ながら、分銅形といえる。2・3は定角式磨製石斧の破片で、いずれも表面に強く擦痕が残る。3では、先端部が横方向の研磨によって鋭利に仕上げられている。

石鎌 3点とも凹基無茎式であるが、4は、平坦な剥離が深く入って、薄く作られている。5は粗く深い剥離により、分厚く作られる。縁辺は、最後に潰すような調整が行われている。6は平基に近く、正面観が五角形である。やや質の悪いチャートを用いているためか、剥離の末端で段を作っている。



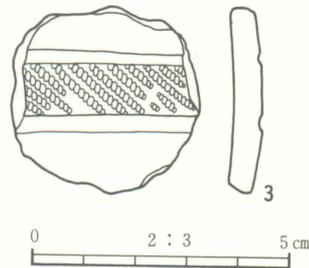
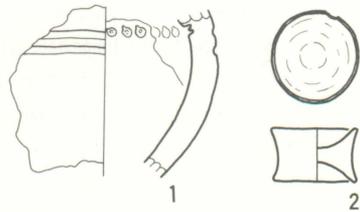
第20図 骨角器

(2) 骨角器 (第20図、図版14)

1・2は骨角鏃に分類されるものであろうか。1は哺乳類の四肢骨製で、両面を入念に研磨した精製品である。2はイノシシ牙製である。エナメル質を残し、反対側を研磨して薄く平坦に加工している。擦痕は先端部で著しく、きわめて鋭利に仕上げられている。これまでの出土例では、平基無茎の牙鏃の場合は、穿孔されるものが多いようである。3は棒状に加工されている。表面の劣化のためか擦痕等は見られなかった。

(3) 土製品 (第21図、図版14)

1はミニチュア土器の破片で、外面に2本の沈線、内面には刺突列が巡っている。2は1号人骨が装着していたとみられる耳栓である。凹面はナデ、側面は弱いミガキによって仕上げられている。3は加曽利B式土器を利用した円板状土製品で、周囲を打ち欠いている。



第21図 土製品

3. 動物遺存体

今回調査された貝層からは、たいへん多くの動物遺存体が発見されているが、貝類を除くと本格的な分析結果を記載するには至らなかった。ここでは、2T-01・3T-01および3T-09計3遺構より発見された遺存体の概要についてのみ中間報告を行う。ただし、3T-01、3T-09から出土した獣骨の概要については、検出遺構の部分で述べた。この他に動物遺存体が発見されているのは、2T-03または04、3T-03、6T-01・02・08・20・26、7T-01の各遺構内および各トレンチ表土内である。

なお、種同定は軟体動物を出口が行い、脊椎動物については小宮氏にお願いした。

(1) 同定結果

これまでに同定されている種は表3の通りである。今後、分析が進めば新たに多くの種が追加されると思われる。

軟体動物 MOLLUSCA

腹足綱 GASTROPODA

アワビ類	<i>Nordotis</i> sp.
イボキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i>
カワニナ	<i>Semisulcospira libertina</i>
ヘナタリ属	<i>Cerithdea</i> spp.
ウミニナ属	<i>Batillaria</i> spp.
ツメタガイ	<i>Glassaulax didyma</i>
アカニシ	<i>Rapana venosa</i>
アラムシロ	<i>Reticunassa festiva</i>
イモガイ科	Conidae gen. & sp. indet.
有肺亜綱種不明 (陸産微小貝)	

二枚貝綱 BIVALVIA

マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
マツカサガイ	<i>Inversidens japonensis</i>
イシガイ科種不明	Unionidae gen. & sp. indet.
ヤマトシジミ	<i>Cobicura japonica</i>
オキアサリ	<i>Gomphina (Macridiscus) aequilatera</i>
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>
カガミガイ	<i>Dosinorbis (Phacosona) japonicus</i>
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
バカガイ	<i>Mactra quadrangularis</i>
シオフキ	<i>Mactra veneriformis</i>
ムラサキガイ	<i>Hiatura diphos</i>
マテガイ	<i>Solen strictus</i>
オオノガイ	<i>Mya arenaria oonogai</i>

節足動物 ARTHROPODA

甲殻綱 CRUSTACEA

フジツボ類	Thoracica fam. indet.
-------	-----------------------

脊椎動物 VERTEBRATA

軟骨魚綱 CHONDRICHTHYES

軟骨魚綱種不明	Chondrichthyes order indet.
---------	-----------------------------

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

ニシン科種不明	Clupeidae gen. & sp. indet.
フナ	<i>Carassius auratus</i> sp.
コイ科種不明	Cyprinidae gen. & sp. indet.
ウナギ	<i>Anguilla japonica</i>
スズキ属	<i>Lateolabrax</i> sp.
ハゼ科	Gobiidae gen. & sp. indet.

鳥綱 AVES

キジ	<i>Phasianus colchicus</i> cf. <i>versicolor</i>
----	--------------------------------------------------

哺乳綱 MAMMALIA

アカネズミ	<i>Apodemus</i> cf. <i>speciosus</i>
イノシシ	<i>Sus leucomustax</i>
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>
ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i>

表3 動物遺存体種名一覧

貝類 1953年の報告から知られる当貝塚出土貝類のうち、今回同定されなかったものには、ダンベイキサゴ・ヒダリチリメンカワニナ・ナガニシ・バイ・トカシオリイレ・ツノガイ類・ベンケイガイ・サルボウ・アカガイ・イタヤガイ・ミルクイ・ウバガイがある¹。先の報告ではバイを除くと出土頻度は稀または少量とされている。バイについては、サンプル中には現れなかったものの、調査中にしばしば見かけており、比較的多く採取されていたと思われる。

一方、今回新たに加えられたものには、マツカサガイ・オキアサリ・バカガイ・ムラサキガイである。これらはみな重量比0.1%までの出土量であったが、マツカサガイについては、数個がまとまっていたとみられ、淡水産貝類の利用について若干の知見を得ることができた。なお、イシガイ科種不明としたものについても、マツカサガイである可能性が高い。

魚類 前回の報告ではマダイ・スズキ・コチ・ボラが各1点同定されており、魚類遺体の数量はわずかと結論している。しかし、今回採取したサンプル中には、上記の4種よりも小形の種を中心として多くの遺体が混じっていた。この理由としては、前回の調査が堀之内期の貝層を対象としており、時期的な差を示している可能性も捨てきれないが、サンプル採取が行われなかったことから、小形種の検出が困難であったことによるのではないだろうか。

これまでに同定されている種のうち、出土量の主体を占めていたのはフナであった。今後、分析が進めば、谷奥貝塚の性格を知る上で貴重なデータが得られるであろう。

鳥類・哺乳類 この両者に関しては、前回とほぼ同様の結果であった。これまでに同定された鳥類はキジ1種のみである。哺乳類ではシカ・イノシシが圧倒的に多く、この2種ではシカの方が多くようである。調査時にも、シカの各部位を数多く見ることができた。

4. 貝サンプルの分析

後期中葉の3箇所の遺構内貝層からサンプルが採取されている。

(1) 採取方法

2T-01 ピット内に検出面から底まで混土貝層が入っていた。分層は行わなかった。ピットを縦割りにした半分を検出面から厚さ10cm毎に、計6カット切り取った。残りの半分は現地で園芸用フルイを使用して土器・骨の回収と貝の集計を行った後に排土した。

3T-01 面的に広がった貝層に50cmメッシュをかけ、区切られたブロック毎にすべてサンプリングした。厚みは任意であり、合計18カット採集した。カットNo.8については、明らかに覆土内貝層を切っているピット内貝層とみられたため、別のカットとしたものである。

3T-09 セクション面観察後の残り半分を一括サンプリングした。残念ながら、切り合

¹前回の報告でキサゴ・マシジミとされたものについては、それぞれイホキサゴ・ヤマトシジミである疑いがあり、ここには加えなかった。また、陸産種については、同定しなかったため除外した。

った2基のピットを一緒にあつかってしまった。

	採取法	数量	時期	遺構
2 T-01	不定量 垂直ブロック	6カット 28.5 l	加曾利B 3 ~ 曾谷	ピット
3 T-01	不定量 垂直ブロック	18カット 119.5 l	堀之内2 ~ 加曾利B	住居跡
3 T-09	不定量 一括	1カット 36.0 l	加曾利B 1 (?)	ピット 2基重複

表4 貝サンプル一覧

採取量 これらのサンプルはすべて不定量であり、各カットの量は等しくない。本来は堆積している状態の体積や、採取後の風乾重量によって採取量を把握するのが望ましいが、今回は、水洗の前に目盛りの入った4リットル升で測った体積を記載した。したがって、堆積時より、かなり大きな数字となるばかりでなく、貝の比率の高いカットほどかさが増してしまう欠点があり、目安程度のものである。

(1) 集計・計測方法

貝サンプルの水洗は、9.52、4、2、1 mmメッシュの試験フルイを用いて水洗分離を行い、室内で乾燥後選別作業を実施した。貝類は9.52、4 mmメッシュ面上に残った資料について選別作業を行い、腹足綱は殻軸の1/2以上を保存するもの、二枚貝綱は左殻のうち殻頂部を保存するものの個体数を集計した。重量については、保存部位にかかわらず無理なく同定できるすべての破片を集計した。また、二枚貝の殻長を計測した。

(2) 貝類の組成比率 (表5)

個体数でイボキサゴ、重量ではハマグリがもっとも多く、この2種も含む内湾干潟産の貝類がほとんどを占める。これは、都川流域の縄文中・後期全貝塚に共通した産状といえよう。

ウミニナ・ヘナタリ・アラムシロ イボキサゴのかき集め採取に伴って紛れ込んだと推定されるが、今回はイボキサゴの出現率との関連を裏付けるデータは得られなかった。

淡水および汽水種 淡水産のマツカサガイ・カワニナは、出現率は低いものの比較的多くのカットでみられた。これは淡水域での貝採取がある程度行われていたことを示している。一方、汽水産のヤマトシジミはわずか2個体検出されたにすぎない。

イモガイ科 全体に摩耗した殻頂部破片が1点見られた。垂飾の未成品であろうか。

(4) 貝類の大きさ (表7)

大きさを計測したのは、二枚貝のうち殻長を計測できる資料が比較的まとまって得られた、ハマグリ・シオフキ・アサリの3種と、腹足類のうちアカニシ・ツメタガイの2種、計5種である。ハマグリ以外の種では資料数が少なく、安定した統計値とはいいがたい。今回は、調査時点での所見も合わせて、若干の私見を述べておくにとどめたい。

種名	2T-01		3T-01		3T-09		合計	
	個体数 (%)	重量 g (%)						
アワビ	0.0	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0	2.5
イボキサゴ	1623	655.8	15279	91.4	847	92.9	17749	4875.6
カワナナ	1	1.0	14	0.1		0.0	15	8.4
ヘナタリ	4	1.0	4	0.0		0.0	8	1.5
ウミノナ属	38	15.0	97	0.6		0.0	135	41.6
ツメタガイ	3	34.0	6	0.0	1	0.1	10	76.6
アカニシ	1	12.1	5	0.0	1	0.1	7	135.4
アラムシロ	19	0.8	55	0.3	1	0.1	75	16.5
イモガイ科	0.0		1	0.0		0.0	1	0.7
マガキ	41	1.6	4	0.0	23	2.5	68	294.0
マツカサガイ	2	10.4		0.0		0.0	2	10.4
イシガイ科	0.0	5.0		0.0		0.0	0	9.5
ヤマトシジミ	0.0		2	0.0		0.0	2	1.8
オキアサリ	0.0		1	0.0		0.0	1	5.3
アサリ	19	0.8	38	0.2	3	0.3	60	267.9
オキシジミ	2	10.1	6	0.0	1	0.1	9	56.3
カガミガイ	0.0		4	0.0		0.0	4	54.7
ハマグリ	658	3484.3	1091	6.5	34	3.7	1783	10279.9
バカガイ	0.0			0.0		0.0	0	1.7
シオフキ	80	3.2	92	0.6	1	0.1	173	1028.0
ムラサキガイ	1	0.0		0.0		0.0	1	0.4
マテガイ	0.0	0.2	14	0.1		0.0	14	20.6
オオノガイ	0.0		12	0.1		0.0	12	36.3
二枚貝種不明	0.0		1	0.0		0.0	1	1.3
合計	2492	5140.3	16725	100.0	912	100.0	20129	17225.9
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表5 貝類同定結果

調査の際に目についたことは、ハマグリが大きさが、比較的ばらつきが大きいのに対して、アサリやシオフキは大きさがまとまっていることであった。この傾向は今回提示したサンプルデータにもある程度現れている。ハマグリでは、25mmから55.2mm付近まで幅広く採取されており、平均の37mmからかなり離れた部分まで多く分布している。アサリ・シオフキは資料が少なく、詳しいことはわからないが、ハマグリに比べると標準偏差の値は小さい。ただし、2T-01と3T-01を比べると、両種とも2T-01でばらつきが小さい。

(5) 計測データの評価

今回得られた貝殻の大きさに関するデータに適切な解釈を与えるためには、時期的または地域的に比較し得る他の遺跡のデータが必要である。しかし、今のところ良い例を見つけることができない。ここでは、有効な比較とはいえないが、都川流域の貝塚群のうち、とりあえず詳しいデータの提供されている荒屋敷北貝塚201号跡¹との比較を試みる。

遺跡・遺構	時 期	ハマグリ	シオフキ	アサリ	アカニシ	ツメタガイ
誉田高田・2T-01	加曽利B末	35.2	42.8	36.3		
誉田高田・3T-01	加曽利B初	38.2	41.8	33.8	70.7	29.4
荒屋敷北・201	加曽利B末	29.4	33.9	24.3	48.7	17.0
高田 — 荒屋敷北		7.3	8.5	10.9	22.0	12.4

表6 貝類の計測値比較

上の表には二枚貝の殻長と腹足類の殻高の平均値を示した。最下段の数値は両遺跡の平均値の差である。これによると、すべての種で本貝塚の計測値が上回っており、また、本貝塚の2つのサンプルの値が近いことがわかった。さらに、荒屋敷北貝塚の報告に示された計測値分布のグラフを見ると、アサリの殻長は10mmから40mmまで著しくばらついている。これは、本貝塚の傾向と相反するものである。このように両遺跡における計測値の差は大きいですが、その意味を考えることは現状では困難である。大まかに分けると、時期差（気候や海岸線の変化といった生態的要素を含む）、採集場所の差、嗜好の差などを考慮しなければならず、なるべくこういった条件の似た遺跡と比較する必要がある。

谷奥に位置する貝塚と湾口部の貝塚の貝が等質であったかどうかを知るためには、こうした研究も有効であると思われ、今後のデータの集積に期待したいところである。

¹ 田井知二1986『千葉市荒屋敷北貝塚・谷津上・須磨堀遺跡』

A/ハマグリ

殻長 (mm)	2T-01 (%)	3T-01 (%)	合計 (%)
20.0-22.5	3	0.7	2
22.5-25.0	3	0.4	4
25.0-27.5	16	1.8	21
27.5-30.0	29	2.9	37
30.0-32.5	46	10.1	74
32.5-35.0	51	21.0	109
35.0-37.5	39	17.8	88
37.5-40.0	34	12.3	68
40.0-42.5	19	7.1	50
42.5-45.0	11	4.2	23
45.0-47.5	6	2.2	8
47.5-50.0	4	1.5	5
50.0-52.5	4	1.3	5
52.5-55.0	1	0.4	1
55.0-57.5	1	0.4	2
57.5-60.0	1	0.4	1
60.0-62.5		0.0	0
62.5-65.0		0.0	0
65.0-67.5	1	0.4	1
合計	268	276	544
	資料数 平均 標準偏差	資料数 平均 標準偏差	資料数 平均 標準偏差
	268 35.21 6.37	276 38.21 6.44	544 36.73 6.69

B/シオフキ

殻長 (mm)	2T-01 (%)	3T-01 (%)	合計 (%)
20.0-22.5		0.0	0
22.5-25.0		0.0	0
25.0-27.5		0.0	0
27.5-30.0		0.0	0
30.0-32.5		1	1
32.5-35.0		0.0	0
35.0-37.5	1	11.1	11.1
37.5-40.0	1	11.1	11.1
40.0-42.5	2	0.0	2
42.5-45.0	2	22.2	24.2
45.0-47.5	2	0.0	2
47.5-50.0	1	22.2	23.2
50.0-52.5	1	11.1	12.1
52.5-55.0		0.0	0
55.0-57.5		0.0	0
57.5-60.0		0.0	0
60.0-62.5		0.0	0
62.5-65.0		0.0	0
65.0-67.5		0.0	0
合計	11	100.1	111
	資料数 平均 標準偏差	資料数 平均 標準偏差	資料数 平均 標準偏差
	11 42.84 3.73	9 41.81 6.54	20 42.38 5.21

C/アサリ

殻長 (mm)	2T-01 (%)	3T-01 (%)	合計 (%)
20.0-22.5		0.0	0
22.5-25.0		0.0	0
25.0-27.5		8.3	1
27.5-30.0		0.0	0
30.0-32.5	1	20.0	21
32.5-35.0	1	20.0	21
35.0-37.5	1	0.0	1
37.5-40.0	3	8.3	11
40.0-42.5	1	20.0	21
42.5-45.0		0.0	0
45.0-47.5		0.0	0
47.5-50.0		20.0	2
50.0-52.5		0.0	0
52.5-55.0		0.0	0
55.0-57.5		0.0	0
57.5-60.0		0.0	0
60.0-62.5		0.0	0
62.5-65.0		0.0	0
65.0-67.5		0.0	0
合計	7	100.1	107
	資料数 平均 標準偏差	資料数 平均 標準偏差	資料数 平均 標準偏差
	7 36.25 4.23	5 33.75 7.91	12 35.21 6.16

アカニシ

殻高 (mm)	殻径 (mm)
44.9	32.7
(78.5)	61.1
(79.1)	(61.5)
(80.1)	(57.7)
資料数	資料数
平均	平均
4	4
70.7	53.3

ツメタガイ

殻高 (mm)	殻径 (mm)
26.0	31.8
26.9	29.5
27.9	31.3
31.9	36.3
34.4	38.5
資料数	資料数
平均	平均
5	5
29.4	33.5

二枚貝は2.5mmの幅の度数とその相対頻度の分布を示した。
腹足類は計測値をそのまま記載した。()内は復元した数値。

表7 貝類計測値分布

V 出土人骨

1. 1・2号人骨 (3T-20) (第22図、図版5)

3T-01住居跡に埋葬された合葬人骨である。成人骨を1号、幼児骨を2号とした。

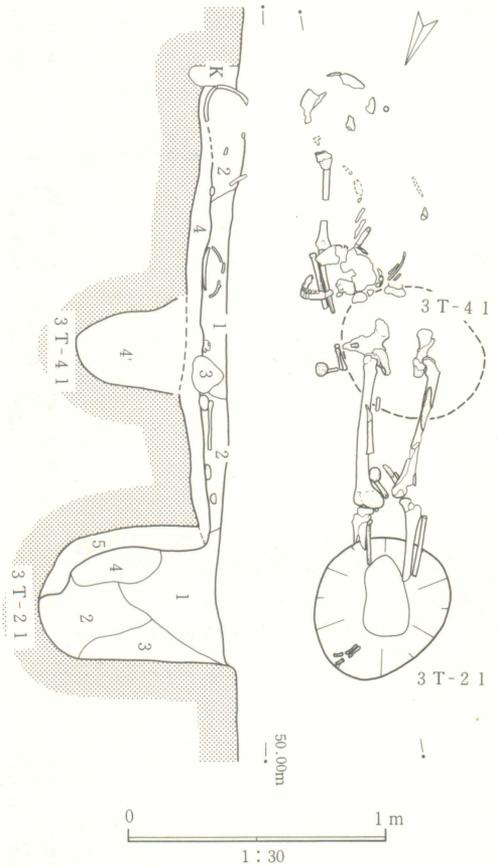
(1) 調査の所見

出土状況 住居跡の貼床面よりやや低いレベルから出土した。断面図に示した4層の上ののっており、骨の各部位の下面レベルは、1号の頭骨を除けばほぼ水平であった。ローム主体の土層中のためか保存はとても悪いが、貝層に入っていた脚部はいくらか残りが良かった。

層位 1・2層は3T-01住居跡の覆土と思われる。4層は、3T-41ピットとともに3T-01に切られた住居跡の覆土であろう。土層の内容は、1. 黒褐色土(径2~4mmの黒色土粒を含む、ローム粒・焼土粒少量含む)。2. 暗褐色土(均質に近い汚れローム)。3. 黄褐色土(ブロック状のローム粒の集積)。4. 暗黄褐色土(若干汚れたローム、比較的しまっていたが、床状に踏みしめられた痕跡はなかった)。

3T-21ピットの覆土は、1. 黒褐色土(ローム淡い斑状に混じる。3~4mmの黒色土粒、チップ状の破砕貝少量含む、疎だがしまる)。2. 黒褐色土(1層に似るがローム少なく、しまり欠く、破砕貝少量含む)。3. 暗黄褐色土(黒褐色土とローム大きな斑状をなす、ややしまる)。4. 黒褐色土(1層に似るが、貝・黒色土粒含まない)。5. 黄褐色土(住居跡覆土の4層と同様、連続したものか)。1・2層は色調、しまり、貝の混入により、3・4層と明瞭に区別できる。柱の抜去痕ではないだろうか。3T-41ピットの覆土は分層できず、住居跡覆土の4層と同様であった。ただし、上部はしまっていた。

時期 住居とともに堀之内2~加曾利B1期とみられる。住居に伴うと考えたのは、墓壇が見られなかったことと、本住居の柱穴とみられる3T-21との同時性がほぼ確実であることによる。1号人骨の腓骨・脛骨と中足骨・指骨の一部は埋葬時の自然位を保ちながらピットの内側に残っている一方で、残りの部分はピットの底近くまで落ち込んでいた。これは、住居の廃絶直後に遺体が埋葬されたことを示すと考える。



第22図 1・2号人骨

埋葬状態 2体とも頭位方向は南東で、顔を東へ向けた仰臥、あるいは側臥伸展葬である。幼児骨は成人骨の右上腕骨から右大腿骨の辺りに乗り、下肢は左膝の下に入っていた。あたかも腕に抱かれているようである。単に同時性を示すということだけでなく、「一緒に葬る」という感情をうかがわせるものであった¹。

(2) 形質

人骨の形質学的な分析結果については、表9に示した。

1号人骨 脊柱と胸郭を除けば、ほぼ全身が遺存していた。ただし、保存状態はきわめて悪く、完全に遺存した部位は皆無である。分析の結果、身長148cm程度の成人女性と推定されている。



2号人骨 (右カット) 頭蓋骨、下顎骨と四肢骨の一部のみを遺存していた。保存状態は悪く、四肢骨の骨端は失われていた。分析の結果、4ないし5歳と推定されている。



2号人骨
1:30

2. 3号人骨 (7T-E) (右カット、図版8)

7Tの西半から頭蓋骨と四肢骨の一部が発見されたが、墓壙等の掘り込みは確認できなかった。攪乱溝によって切られているだけでなく、多くの部位はすでに腐朽していたと思われる。遺存していたのは頭蓋と下肢のごく一部にすぎない。分析の結果は表9に示しており、8~11歳と推定されている。



3. 7T人骨群 (7T-A~D) (第5・23・24図、図版7・8)

7Tより発見された多数個体の二次埋葬墓である。先の調査でも呼び方が決まっておらず、個体毎に番号を付けることはできなかったため、とりあえず7T人骨群と呼ぶことにした。



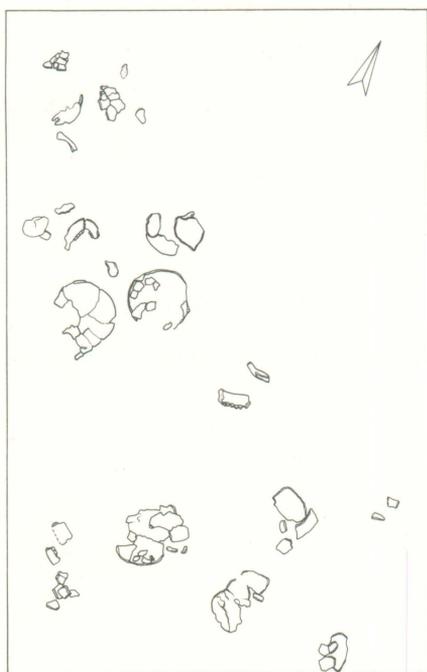
(1) 調査の所見

出土状況 プライマリーな層では、ローム主体の黄褐色土におびただしい数の人骨が折り重なって堆積していた。全体的に土よりも骨が多い状況で層の断面観察は不可能であったが、掘り下げ中の観察では間層は見られなかった。掘り込みの壁際に近い部分では、底面に若干の土が堆積していた。なお、遺構の形状についてはIIIで述べているので、繰り返さない。

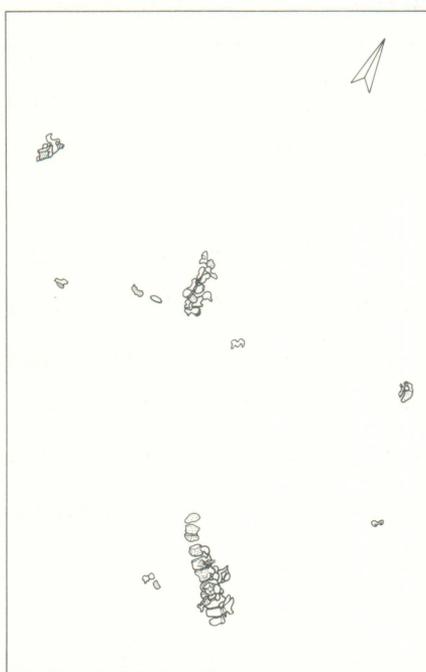


3号人骨
1:20

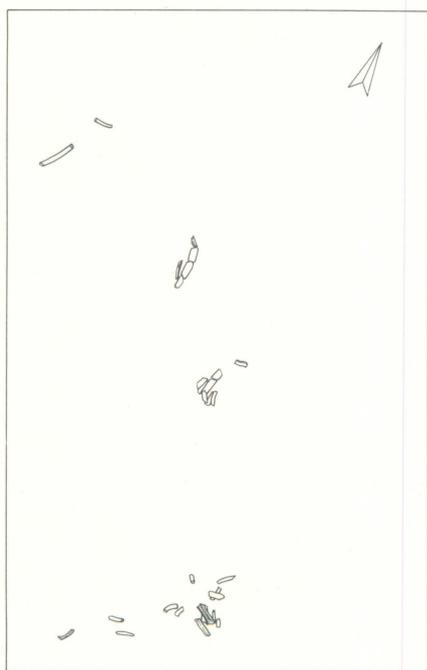
¹成人・幼児の合葬例は多くはないが、幼児が上または前になっていることが多いという。(小金井良精「日本石器時代の埋葬状態」人類学雑誌38-1)



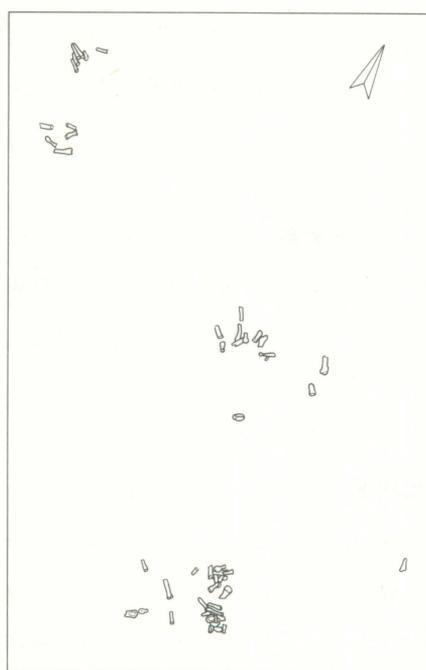
A 頭蓋骨・下顎骨



B 椎骨



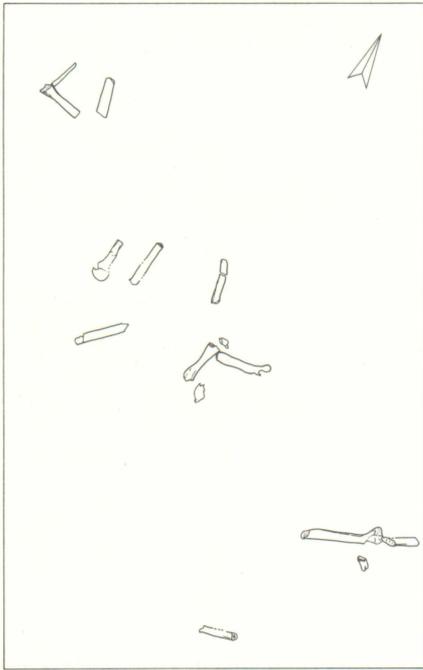
C 肋骨



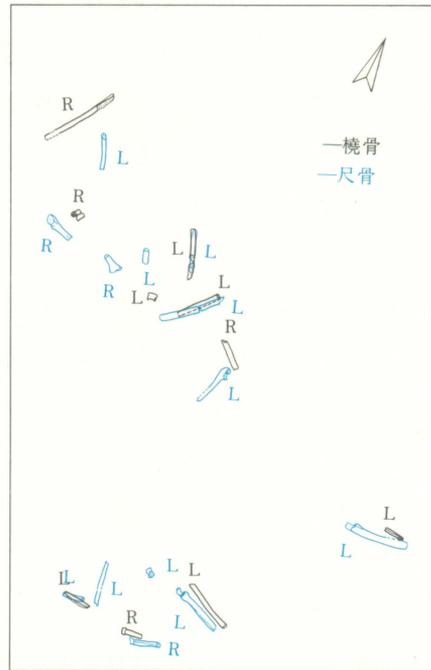
D 中手・中足骨・指骨

第23図 7 T人骨群部位別出土状況(1)

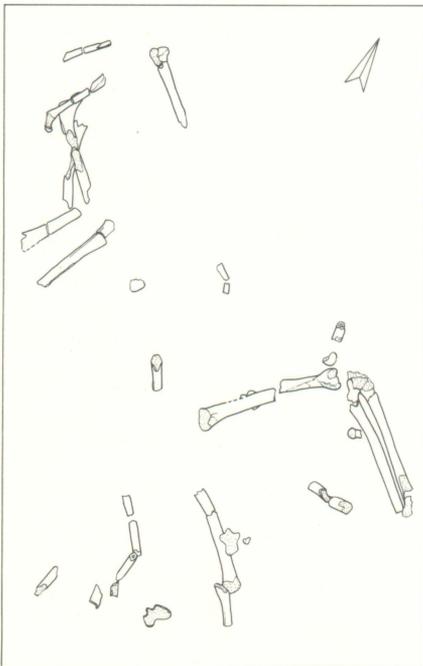




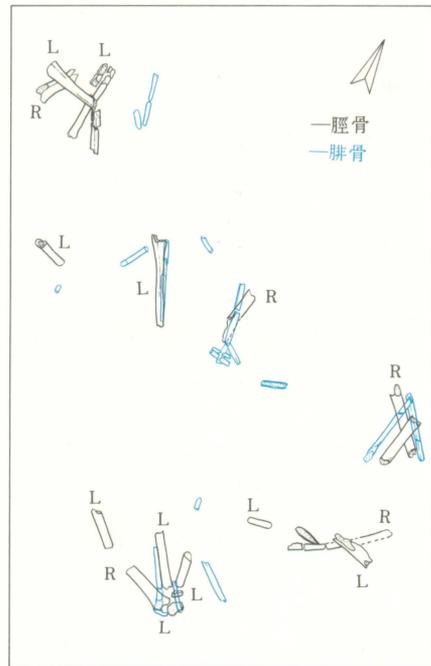
E 上腕骨



F 橈骨·尺骨



G 大腿骨



H 脛骨·腓骨

第24图 7 T人骨群部位別出土狀況 (2)



埋葬状態 解剖学的な自然位を保った個体は皆無であり、再葬された人骨群であることは確実であろう。部位毎の出土傾向を見ると(第23・24図)、指および中手・中足骨や椎骨がまとめられていることが伺われる。さらに、椎骨や四肢骨の一部では骨間の軟部が残っているうちに再葬されたことが明確なものも存在する。この点については後に詳述する。なお、図示したのはある程度埋葬時の状態を示すと思われたものであるが、上部では厳密には原位置を保っていないものが多いとみられる。

伴出遺物 1954年の調査では堀之内式土器を伴出しているが、今回は明らかに墓壙に伴う骨以外の遺物は皆無であった。表土および攪乱層中には、加曾利B式主体の摩滅した土器小片が多量に混じっていたことからすれば、他の遺物が混入していない事実は、この人骨の集積が縄文時代より後に由来する可能性が極めて低いことを物語っている。また、この埋葬施設が、居住空間・廃棄空間といった日常生活の場所から離れて位置していたこともうかがわせる。

(2) 分析結果

分析方法 きわめて多くの資料であり、今回は詳しい分析結果を報告するには至らなかった。ここでは、筆者が試みた部位同定¹および個体数復元の結果をひとまず報告する。これは、全体的な傾向を報告するために行ったものであり、今後専門家の分析を経て詳しいデータを提供することにしたい。

分類 部位、左右別に分けたが、筆者の同定能力の限界から、部位不明や長管骨部位不明といったものが多くなってしまった。とくに、幼児骨の部位同定はほとんど不可能であった。また、腓骨は左右の識別ができなかった。

出土状況 耕作による攪乱を受けていない人骨は、第5図の様に出土した。第23・24図は、実測を行って取り上げた約400点の人骨のうち、主な部位の出土状況を示したものである。自然位を保った個体はなく、各部位がばらばらに堆積している。しかし、脛骨と腓骨や、橈骨と尺骨では軟部で着いたまま埋められたと思われるものが多く、椎骨ではいくつか連結して発見されたものがある。これらは、この土壙墓が二次埋葬墓であり、しかも軟部が完全には腐朽しない間に改葬されたものであることを示している。また、頭骨・四肢骨といった大きな骨が全体に散らばっているのに対して、椎骨・肋骨・手足骨等の小さな骨は、いくつかの地点にまとまっているのが特徴的に見られる。図示しなかった、鎖骨・膝蓋骨・距骨・踵骨・手根骨・足根骨の出土地点についても、ほぼこの集中範囲に納まってしまう。

個体数の復元 部位毎に最も多く残っている部分を集計し、最少個体数とした。また、その部分が欠損していても、集計したものと明らかに別個体と識別できる資料については、参考資

¹部位同定は、分析の終了している有吉北貝塚出土人骨を標本として行った。また、森於菟他1969「骨学」『解剖学』第1巻改訂第10版を参考にした。

料として、括弧内にこれを加えた数字を示した。ただし、この数字の中には、耕作土やショウガ穴の中から取り上げられたものも含まれているので、第23・24図に示したよりもかなり多くなっている。これによれば、左側頭骨から得られた最少個体数は15である。ただし、この15体はすべて成人骨と思われ、他の部位でかなり見られた幼児骨を加えると、さらに多くの個体が埋葬されていたことになる。

なお、1954年の調査で取り上げられた人骨では、右側頭骨から最少個体数17が得られているが、今回の成果を加算するために、側頭骨のうち内耳孔のあるものをみると、右15・左13であるという（3ページ脚注の池田氏の報告による）。これに今回得られた右12・左15を加えると、右で27個体、左では28個体となる。したがって、この土壌には少なくとも28個体以上が埋葬されていたことになる。

部位毎の破片数 頭骨や四肢骨等の大きな骨に比べて、椎骨・肋骨・指骨等が著しく少ないことは、先の成果と同様である。例えば、中手・中足骨と手足の指の合計で、破片数は僅か61にすぎない。特に残りにくい部位ではないので、取り上げ時のエラー等を考慮しても最少個体数からすれば、極めて少ないといえるであろう。

	右	左	集 計 部 位
頭 骨	12	15	側頭骨の内耳孔
上 腕 骨	7	7 (10)	三角筋粗面部
橈 骨	3	6	回内筋粗面部
尺 骨	3	5 (9)	尺骨粗面部
大 腿 骨	11 (13)	9	殿筋粗面部
脛 骨	7 (10)	8	ヒラメ筋線下の大栄養孔
肩 甲 骨	3	5	関節窩肩峰側 (右)・肩峰基部 (左)
寛 骨	8	10	大坐骨切痕の中央部

() 内は推定個体数

表8 7 T人骨群最少個体数算出

表10凡例

- 1… 継続的な集落が形成されたと考えられる時期
- 2… 集落が形成されたとと思われるが明確でない時期
- 3… 集落の主體的な時期以外
- 4… 土器型式不明

貝層の分類記号は、拙稿「遺跡分布図の活用方法について」研究連絡誌21、1988による。

表9 菅田高田貝塚人骨

東京慈恵会医科大学（第1解剖学教室） 加藤 征

No.	部	位
1号人骨		
3 T-20	10	側頭骨 右乳突部、鼓室部
3 T-20	34	頭蓋骨片
3 T-01	27	右の側切歯 咬耗強
3 T-20	45	右 上腕骨 下端
3 T-20	51	右 橈 骨 中央横径15mm、矢状径10mm
3 T-20	52	右 尺 骨 中央横径14mm、矢状径12mm
3 T-20	3	手の舟状骨 動物の歯
3 T-20	6	右手 有頭骨
3 T-20	17	右手 小菱形骨
3 T-20	18	右手 中手骨
3 T-20	19	右手 中手骨
3 T-01	41	左手 第2中手骨 長64mm
3 T-20	20	大人指の骨
3 T-20	50	指骨片
3 T-20	31	肋骨
3 T-20	53	肋骨片
3 T-20	6	右 寛 骨 耳状面が小さい？
3 T-20	7	左 寛 骨 粉状で判別不能
3 T-20	28	左 大腿骨
3 T-20	29	右 大腿骨 矢状径26mm、横径24mm 大腿骨頸から内側上顆までの長さ32.6mm
3 T-20	29	[津雲貝塚人大腿骨の矢状径25.0mm、横径24.0mm]
3 T-20	25	右 脛骨近位端後部
3 T-20	26	左 脛 骨 矢状径27mm、横径19mm
3 T-20	24	右 腓 骨
3 T-20	27	左 腓 骨 Max 15mm、Min 11mm
3 T-20	16	右 膝蓋骨 厚さ18mm
3 T-20	23	左 膝蓋骨 厚さ18mm
3 T-21	2	左 距 骨
3 T-01	49	右 第1中足骨 長58mm
3 T-01	36	右 第2中足骨 長70mm

3 T-01	35	右 第3中足骨	長68mm
3 T-01	37	足の第1基節骨	長31mm
3 T-20	9	足の第3基節骨、中節骨	
3 T-01	33	足の基節骨	長25mm
3 T-01	34	足の基節骨	長22mm
3 T-20	60	足の基節骨の一部	

2号人骨

3 T-20	4	小児下顎骨	4—5歳
3 T-20	8	頭蓋骨上顎骨	歯は左右 M2、M1、C、I2、I1
3 T-20	35	8の中に有り	
3 T-20	36	8の中に有り	
3 T-20	54	頭蓋骨片	
3 T-20	55	頭蓋骨片	
3 T-20	57	頭蓋骨片	
3 T-20	58	椎骨片か	
3 T-20	37	右 腓 骨	
3 T-20	38	右 脛 骨	
3 T-20	39	左 脛 骨	
3 T-20	40	左 腓 骨	

3号人骨

7 T E	3	頭蓋骨片右前頭骨一部残存（前頭結節厚差2.4mm）厚さ薄い
7 T E	3	右上顎第一小白歯歯冠 8—11歳？
7 T E	4	四肢長骨 子供
7 T E	5	四肢長骨 子供

1号人骨

寛骨の残存状態が悪く性の判別が困難が寛骨の耳状面が小さく、長骨の太さなどから女性成人骨と思われる。

右大腿骨とはほぼ同じ長さの現代人のものから全長を計測すると38.5mm—39.3mmに相当する。

女とし推定身長 = 147.7265 から 149.2 平均値から 148.3 とされる。

現代人大腿骨（38.5、38.7、38.8、39.3mm）平均 38.8

2号人骨

同時埋葬の小児は歯牙の状態から4ないし5歳位と思われる。

3号人骨

小骨片が多く明確な判断は困難ではあるが、8—11歳くらいの子供と思われる。

VI ま と め

1. 集落の時期

これまで、集落の継続期間としては、後期前葉から末葉までの期間が知られていた。先の調査では大規模な遺構外貝層が調査され、その一部は堀之内内に形成されたこと、またその下に同期の遺構が存在することが明らかになっている。一方、今回の調査では堀之内内の集落に関する資料はあまり得られなかったものの、4Tを設定した東側斜面にかなり遺物が流れ込んでいるのがみられた。加曽利B期～後期安行期は、2T・6Tのピット群の主体となる時期である。得られた土器片の量も最も多かった。3T西半では安行期の土器が多く見られた。また、はじめて晩期前半の資料が得られ、継続期間はこの時期まで下る可能性が出てきた。出土した土器の数量は多くはないが、その時期まで大きく途切れることなく集落が営まれていたようである。



第25図 土器片分布状況

時期的な変化を見ると、2T・6Tでは圧倒的に加曾利B式土器が多かったのに対して、中央に近い3Tでは安行期の遺構が多いようであった。また、堀之内式土器は、東側の斜面部に流れ込んでいた。この傾向は、調査と同時に実施した表面採集や観察の結果ともおよそ一致する。

第25図は、表面採集によって把握された土器の散布量を3段階に分けて示したものである。各時期の傾向がよく現れていると思われる。堀之内期には、北側から東側にかけての斜面部に多く散布していた。ただし、貝層部分については、土器の包含層位が低いため、加曾利B期の遺物に比べて表面に現れにくいことも考えられる。加曾利B期では貝層の内側にも多く分布しており、これは堀之内期にはみられない傾向である。後期安行期には、より中心に近い部分に集中しており、トレンチ発掘の成果とよく一致した。晩期では、5T付近以外に貝層の北側部分で若干採集されている。

2. 貝層の分布（折込付図）

先の調査以来、本貝塚はa～dの4つの貝層からなるとされてきたが、今回のボーリング調査によって、ずっと複雑であることが明らかになった。比較的大きな4つの貝層は遺構外まで広がっていると思われるものであり、この他に住居跡・土坑の覆土や、ピットなどに堆積したと思われる小貝層が多数分布して、全体として台地上の北側から東側の斜面にかかるあたりに弧状に連なっている。トレンチ発掘によって検出したものはすべて上面が耕作によって削り取られており、遺構外貝層については現在見るよりも広く分布していた可能性が高い。

ここで気になるのは、台地上のコンタが馬蹄形を描いているのに、西側に貝層が見られないことである¹。この部分は現在杉の植林地となっており、土器の散布が少ないのは、表面に遺物が露出しにくいことによる可能性がある。しかし、貝層については、ボーリング調査によってロームの上面まで確認できており、綿密に探ったにもかかわらず、ついに1箇所も確認できなかった。これは、一つにはこの台地上に際だって強く吹きつける西風が原因であったと考えられる。現在の杉の植林も防風を目的としたものであり、想像をたくましくすれば、あるいは縄文人も伐木を控えたのではないだろうか。

3. 遺構配置と集落の範囲

調査した範囲はわずかであったが、集落内の諸施設が居住・廃棄・埋葬といった機能毎にある程度分かれて配置している様子が伺われた。

居住施設 先の調査では、大規模な貝層下で堀之内・加曾利B期の住居跡が検出されており、今回の調査と併せて、貝層下および貝層の内側に居住施設が集中することが確認された。特に、2T・6Tと3Tの東半では重複が激しかった。

¹杉林の中に数箇所の貝散布が認められたが、表面だけであった。地元の方の話からも、畑の貝殻を捨てたものようである。

廃棄施設 現地立つと、弧状に分布する貝層部分は若干高くなっているのがわかる。これは、緩斜面の傾斜変換線付近に貝が集中的に廃棄されたために、稜線を作っているものと思われる。この貝層の外側の状況については4Tから知られるのみだが、ここでは、廃棄は行われていなかったようである。いずれにせよ、廃棄行為が北～東側の台地の縁に集中して行われたことは確実である。

埋葬施設 7T付近は、居住施設の空白部分であることと埋葬施設が集中することが確認され、両施設の配置空間が意識されていた可能性がある。一方、3Tでは廃屋墓が発見されて少なくとも2通りの埋葬方法が存在したことになる。ただし、これが時期差であるかどうかについては明らかでない。

その他の施設 柱穴よりかなり径の大きな落ち込みが2T・3T・4Tで検出されたが、掘り下げた4T-01は時期・性格ともに不明であった。多くは、小竪穴と呼称している当地域の後期の集落に通有な貯蔵施設ではないだろうか。

集落の範囲 集落を構成している各施設の配置の傾向は以上のように貝層の範囲の内側に集中しているが、土器の散布は緩斜面に広く及んでおり、南東の尾根を通じて冬寒台遺跡に連続している。同時期の拠点集落である加曾利(南)貝塚¹や園生貝塚²で確認されているように、集落の範囲が貝層の内側に限られるという認識は全く根拠を失っており、集落範囲を確認するためには広い範囲を面的にカバーできる方法を採用する必要がある。

4. 生産活動

貝類の組成表をみると、下流の諸貝塚と共通点が多い。すなわち、個体数ではイボキサゴが、重量ではハマグリが最多となること、この2種を含む松島義章氏のいうB群集・A群集が³、組成のほとんどを占めることである。干潟における貝類採取に関しては湾口部に位置する集落から、谷奥に位置する集落まである程度均質な活動を行っていたと推定される。淡水あるいは汽水産の貝類採取に関しては、全体に不活発という点で共通するものの、構成種の差は指摘できそうである。これまでにヤマトシジミが比較的多く検出されているのは、湾口部に近い貝塚であり、サンプルデータが知られるものとしては、矢作貝塚⁴がある。加曾利貝塚では、中期にはヤマトシジミのブロック貝層があるのに、後期にはわずかに混じる程度になっている。このことは、後期には湾口部に近い場所に汽水の干潟が広がっていた可能性を示すと思われるが、やはりC₁₄年代などに裏付けられたボーリングデータによって結論を出すべきであろう。

¹後藤和民1990「加曾利貝塚における物理探査」関東甲信越静地区埋蔵文化財担当職員共同研修協議会研修資料

²寺門義範・山下亮介1990『埋蔵文化財調査(園生貝塚)報告書』

³松島義章1982「魚撈対象動物(貝類)の地域性」季刊考古学1など。

⁴清藤一順他1981『千葉市矢作貝塚』30×30×10cmのサンプル中に数百個体入る例もあり、とても多く混じっている。

魚骨に関しては、これまでとても少ないと報告されていたが、今回は多量に検出した。淡水種のフナが主体であり、谷奥貝塚の特色を示していると思われるが、明確な意義付けは今後の研究を待ちたい。獣骨はシカ・イノシシ主体であり、シカの方が多いであろうことは先の調査の成果と一致している。経験的な観測からすれば、獣骨はきわめて多く、チャート、黒曜石の剥片が比較的多く散布していたので、狩猟活動は活発であったであろう。

5. 貝塚形成当時の海岸線

第26図には、菅田高田貝塚の位置と都川水系を中心にした縄文後期の貝層をもつ集落の分布を示した。

当貝塚は、存在が確認されて以来、海岸線から遠く位置することや、高い標高から、縄文期の海進や地盤の隆起・沈降といった自然環境の変化を論じる材料として取り上げられてきた。すなわち、当時本貝塚近くの谷（標高37m）まで海水が進入していたとすれば、谷の下流に位置する同時期の矢作貝塚や台門貝塚の所在する台地の標高は37mより低く、海面下に没してしまう。この矛盾は、関東造盆地運動によって貝塚が形成された時期より後に、本遺跡付近の土地の隆起量が大きかったことによって、現在のような標高の差が生じたと説明できる、というものである¹。しかし、沖積層に埋没した海成層のボーリング調査によって、縄文時代の海岸線が具体的に復元されると、海水は必ずしも貝塚の近くまでは及んでいないことが明らかになった²。すなわち、上述の論の前提であり、本遺跡の先の報告でも原則としていた「貝塚の貝は、先ずその貝塚の直ぐ近くで採集されたものである」という常識論的な考えを捨てる必要が生じたわけである³。

残念ながら、都川谷のボーリングデータの分析は進んでおらず、海進ピーク時の海岸線が推定されているにすぎない（第26図のY地点）。このY地点から本遺跡の下谷までは約6.3kmあり、海退に向かったとみられる縄文後期の人々は、さらにこれ以上の距離を往復して海産物を得ていたことになる。また、先に述べたように貝類の種構成が谷奥から湾口部の貝塚まで等質的であることからみれば、生産領域としての海や海岸は、堀越氏が述べたように「臨海集落に独占されることなく共有された」と考えられ、こういった社会状態によって当貝塚も存在し得たのであろう。

6. 貝塚集落の分布

表10に示した都川流域の後期貝塚の継続時期を見ると、おおよそ次の2通りのパターンがみられる。1つは中期加曽利E期から集落が継続しているもので、もう1つは堀之内期から集落

¹伊藤和男1958「貝塚より見た千葉市附近の海進海退」古代28など

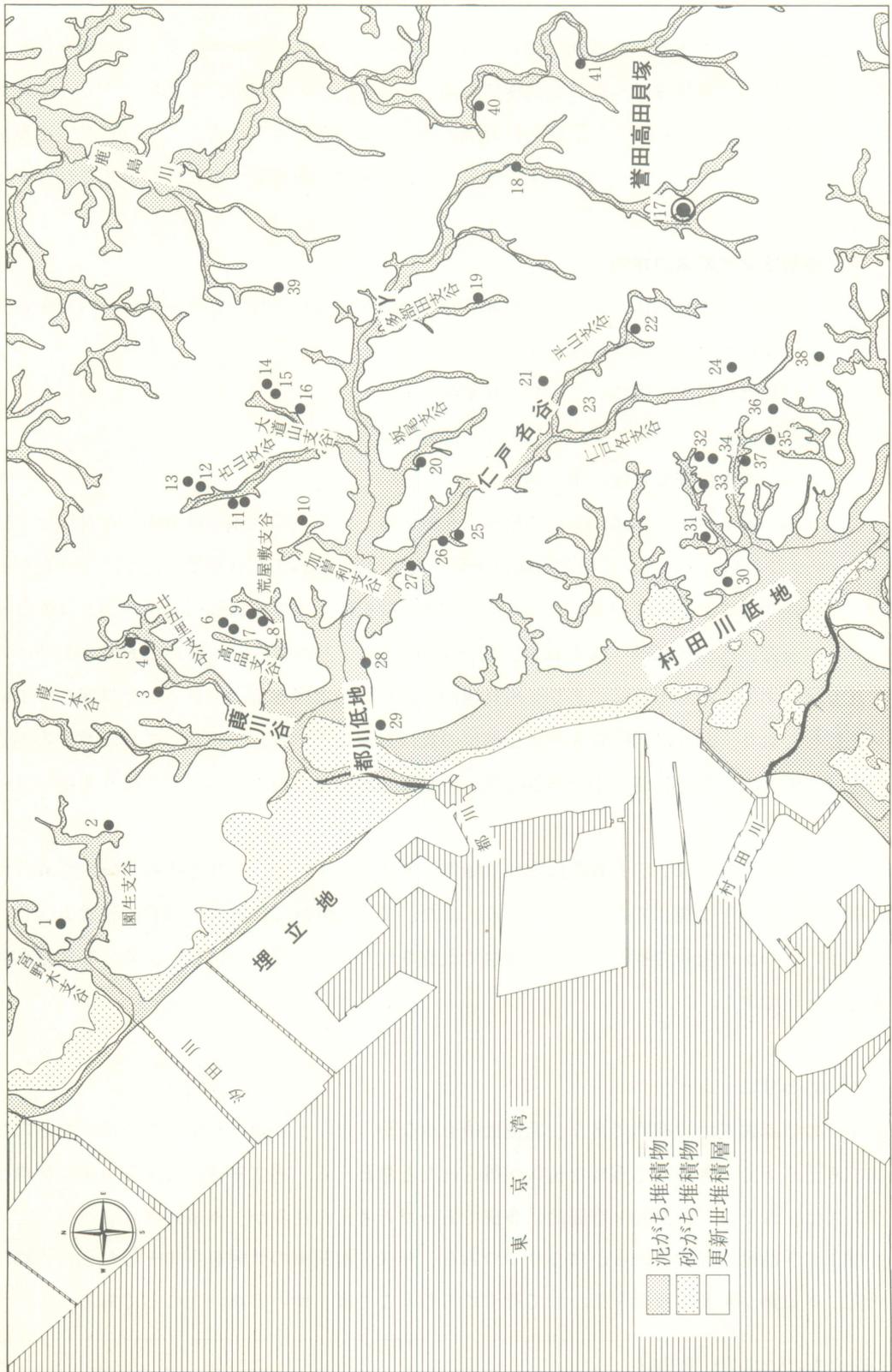
²松島義章1982「小金沢貝塚周辺の沖積低地」千葉東南部ニュータウン10、小金沢貝塚など

³堀越正行1972「縄文時代の集落と共同組織」駿台史学31など

地形区分	No.	名称	加 E		後 期			晩 期		貝 層	備 考	県 No.			
			前	後	初	前	中	後	前				後		
汐田川谷	1	東ノ上貝塚								点列? B		159			
	2	園生貝塚								馬蹄形 Bac	長者山貝塚	180			
都 谷	葭 川	廿五里支谷	3	東寺山貝塚							馬蹄形 後期貝層不明		264		
			4	廿五里南貝塚							馬蹄形 Bak		290		
			5	廿五里北貝塚								(点列6) 中期主体		205	
	高品支谷	荒屋敷支谷	6	草刈場貝塚							馬蹄形 B		273		
			7	向ノ内貝塚							地点 Ba	草刈場南貝塚	275		
			8	台門貝塚							馬蹄形 B		348		
	加曾利支谷	9	荒屋敷貝塚								馬蹄形+地点 中期主体		349		
		10	花輪貝塚								馬蹄形 Ba		359		
	川 谷	古 山	古 山 支 谷	11	加曾利貝塚							馬蹄形2+地点 Bakt		299	
12				滑橋貝塚							点列8 Bk		300		
13				広ヶ作貝塚							点列6以上 B		309		
大 道 山 支 谷		14	蕨立貝塚								(点列8) 中期主体		417		
		15	さら坊貝塚								(点列5) 中期主体		400		
		16	台貝塚								点列4 Ba	坂月台貝塚	376		
都川谷奥	17	誉田高田貝塚								馬蹄形+地点 Bat		906			
	18	川井貝塚								Ba	道ノ下貝塚	658			
谷	多部田支谷	19	多部田貝塚							馬蹄形 B		632			
	坂尾支谷	20	押元貝塚							馬蹄形 Ba		506			
	仁 戸 名 谷	平 山 支 谷	仁 戸 名 支 谷	21	築地台貝塚							馬蹄形+地点 Ba		756	
				22	長谷部貝塚							馬蹄形 Bat		898	
				23	台畑貝塚							点列18以上 Ba		737	
	都川 低地直面	村田川低地直面	上 赤 塚 支 谷	泉 支 谷	24	野田貝塚						地点	小谷貝塚 消滅	1027	
					25	へたの台貝塚							(点列8) 中期主体		596
					26	月ノ木貝塚							(馬蹄形) 中期主体		597
					27	高崎台貝塚							(点列5) 中期主体		493
	村 田 川 谷	大 金 沢 支 谷	金 親 支 谷	鹿 島 川 支 谷	28	矢作貝塚						馬蹄形 Bak		475	
29					亥鼻貝塚							馬蹄形? Ba		482	
30					森台貝塚							馬蹄形 B	南生実台貝塚	987	
31					上赤塚貝塚							馬蹄形 Ba		857	
32					有吉北貝塚							(馬蹄形+地点) Bat	日照田貝塚 称名寺期貝層	865	
33					大井戸作貝塚							点列?	有吉南貝塚 消滅、内容不明確	873	
34					有吉南貝塚							(馬蹄形) 中期主体	有吉(宮前)貝塚	871	
35					小金沢貝塚							点列 Ba	六通西、堂面貝塚 52・53年調査後消滅	1012	
36	六通貝塚							馬蹄形 B		992					
37	木戸作貝塚							馬蹄形 Bakt	道作貝塚 49~51年調査後消滅	995					
38	大膳野南貝塚							馬蹄形 Bak	大膳野、長堀貝塚	1080					
鹿 島 川 支 谷	鹿 島 川 支 谷	鹿 島 川 支 谷	鹿 島 川 支 谷	39	荒立貝塚						馬蹄形? B		404		
				40	野呂山田貝塚							点列6 Bat	奥新田貝塚	676	
				41	八反目台貝塚							点列5~6 Ba		789	

■ 1 ■ 2 - - - 3 ····· 4 (凡例は35ページ欄外)

表10 都川周辺の後期貝塚一覧



第26図 都川周辺の後期貝塚

が形成されたものである。当貝塚は後者に当てはまるが、これは、谷奥に位置する川井貝塚・荒立貝塚・野呂山田貝塚・八坂目台貝塚に共通している。この傾向は、①後期に入るとにわかには狩猟活動が活発になること、②鹿島川流域に多くの遺跡が形成されること、に符合する現象といえよう。さらには、堀之内期に上に述べた「社会状態」が安定したことが予想されよう。

7. 多数個体埋葬墓の類例

7 T人骨群では多数個体が集中して埋葬されていたが、これに類似した例がいくつか知られている。いずれも県内の後期貝塚で検出されたものである。

- A. 船橋市宮本台遺跡 2-9-B土壌¹
- B. 船橋市古作貝塚 第10~11・17~29号人骨²
- C. 市原市祇園原貝塚 第1例³

このうち、宮本台例(15体)と祇園原例(6~7体)では、各個体が解剖学的な自然位を保っている。この2例はいずれも堀之内期の所産であり、掘り込みの形状や壁の近くにピットをもつこと等の共通点をもっている。これらは、初葬人骨を伴う点で誉田高田貝塚の例とは異なっている。一方、古作貝塚例(成人12体、幼児2体)は、「上下肢骨の土壌内における配列はいずれも解剖学的にみて不自然であり」当貝塚例と同様の二次埋葬墓である。古作貝塚では土壌を完掘しており、頭骨・四肢骨等の主な部位の数はおおよそ一致している。これに対する小骨の数は、例えば中手骨46個・手の指骨61個・中足骨46個・足の指骨31個と、やはり少ないといえるであろう。

このように、当貝塚7 T人骨群は古作貝塚例に共通点が多いが、掘り込みの規模や埋葬された個体数はこれを凌駕しているようである。また、7 T人骨群では橈骨と尺骨、脛骨と腓骨、およびいくつかの椎骨で軟部がついた状態で改葬されたことが明らかになり、新たな知見を加えることができた。

7. おわりに

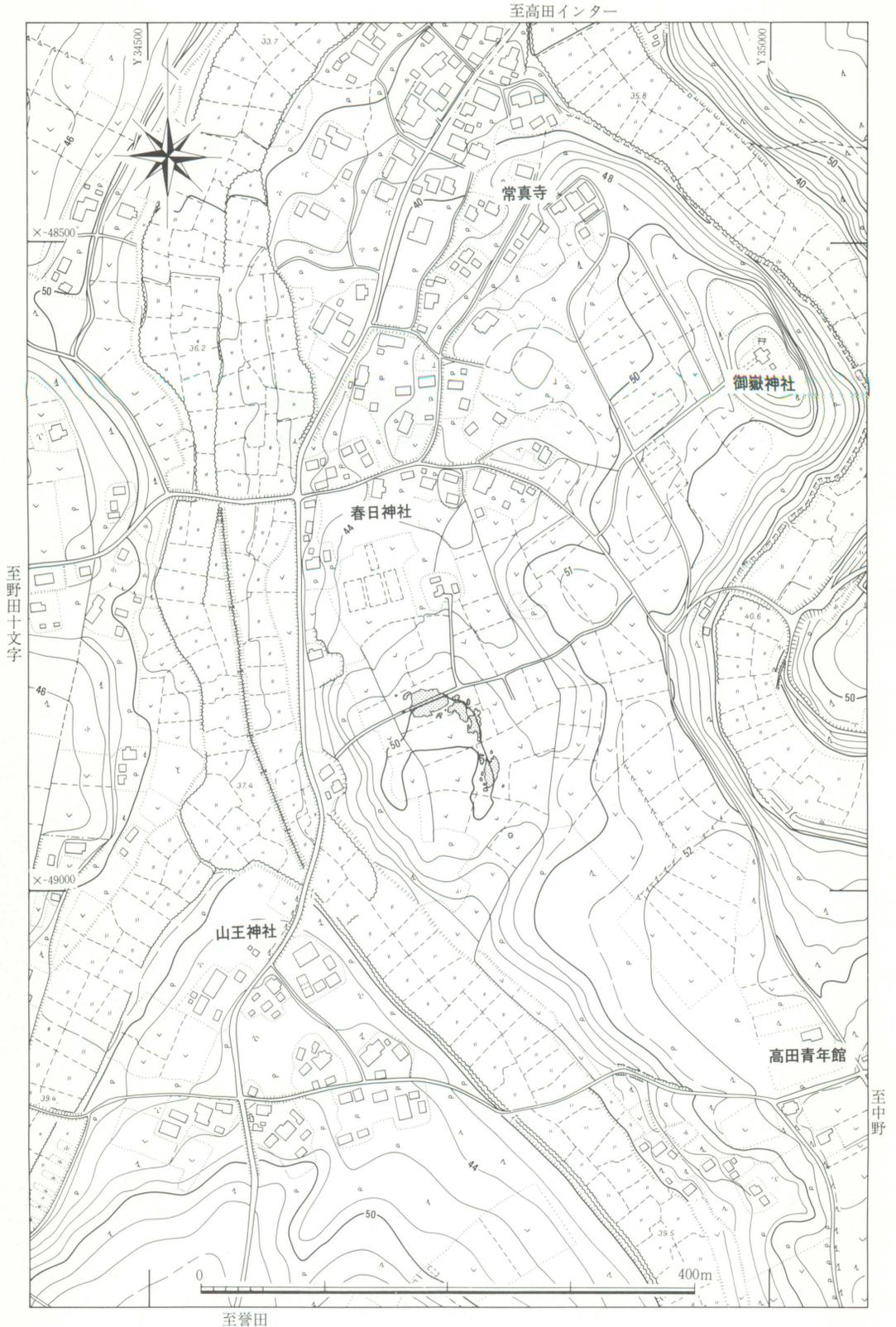
今回の確認調査は短期間であり、発掘面積も少なかったが、谷奥の貝塚を伴う拠点集落の意味を考える上で、きわめて重要な情報が得られたと思われる。縄文集落における生業活動のバランスは、おそらく時期的・空間的に多様であったと考えられるが、本遺跡は「谷奥型」とでも呼ぶべき活動の実態が明らかになりつつある。今後、南関東の貝塚を主体とした生産活動の研究に本遺跡が重要な役割を果たして行くであろうことは、疑いの無いところである。

¹宮本台遺跡調査団1974『宮本台』

²岡崎文喜1983『古作貝塚II』

³米田耕之助1980「縄文時代における一葬法」古代67

写 真 图 版



第27図 菅田高田貝塚周辺の地形 (1:5000)



空からみた誉田高田貝塚周辺の地形



遺跡の景観(1) 北東遠方から



遺跡の景観(2) 貝散布南東から



1 T
南から



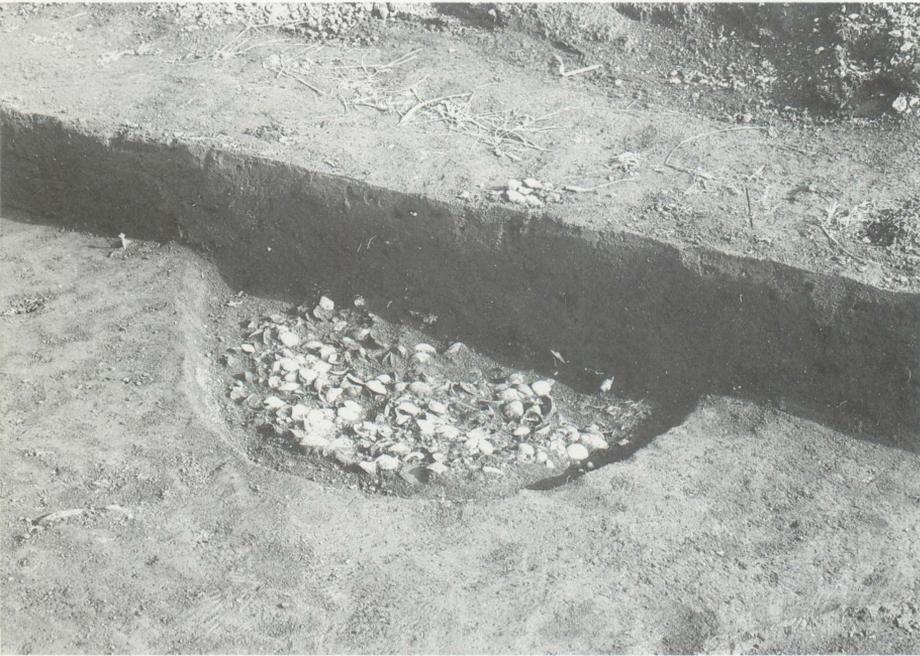
2 T
西から



2 T-0 1
検出状況



3 T-0 1
貝層検出状況



3 T-0 3
貝層検出状況



3 T-2 4
古墳時代住居跡
検出状況



1·2号人骨(1)



1·2号人骨(2)



3T-09
鹿角出土状况



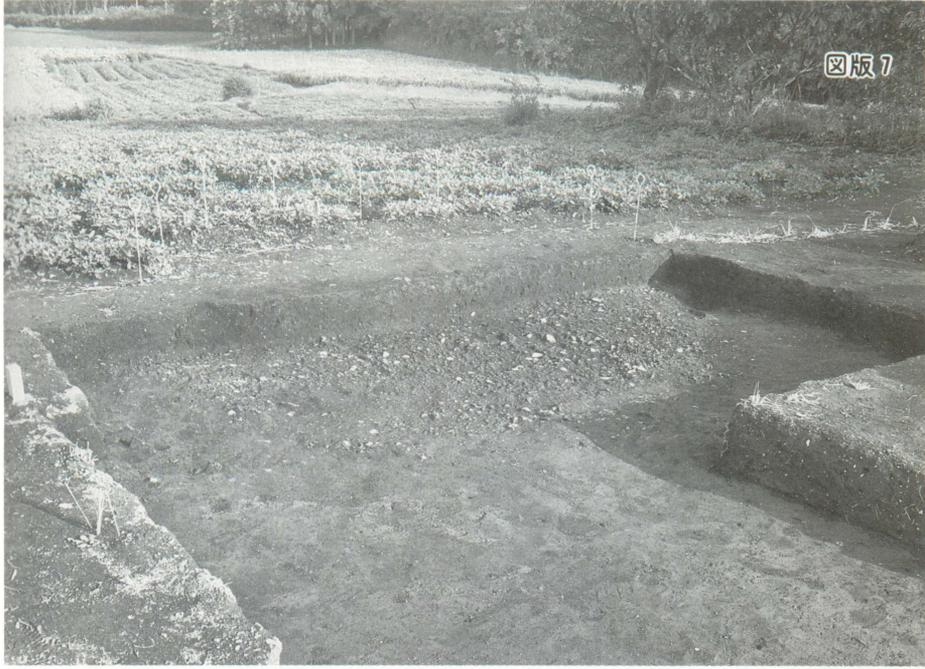
3 T-0 9
サル下顎
出土状況



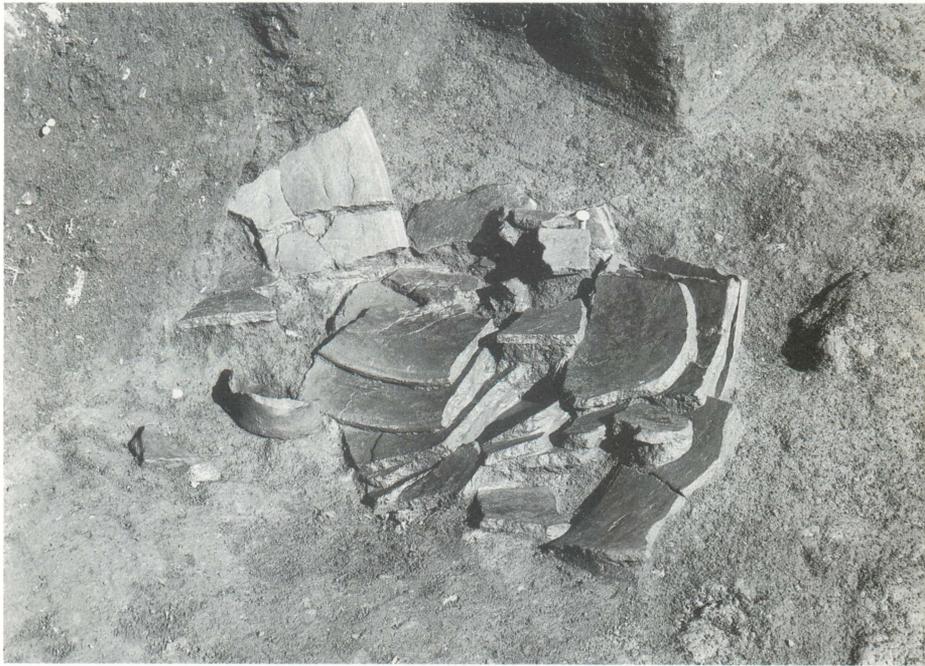
5 T
南から



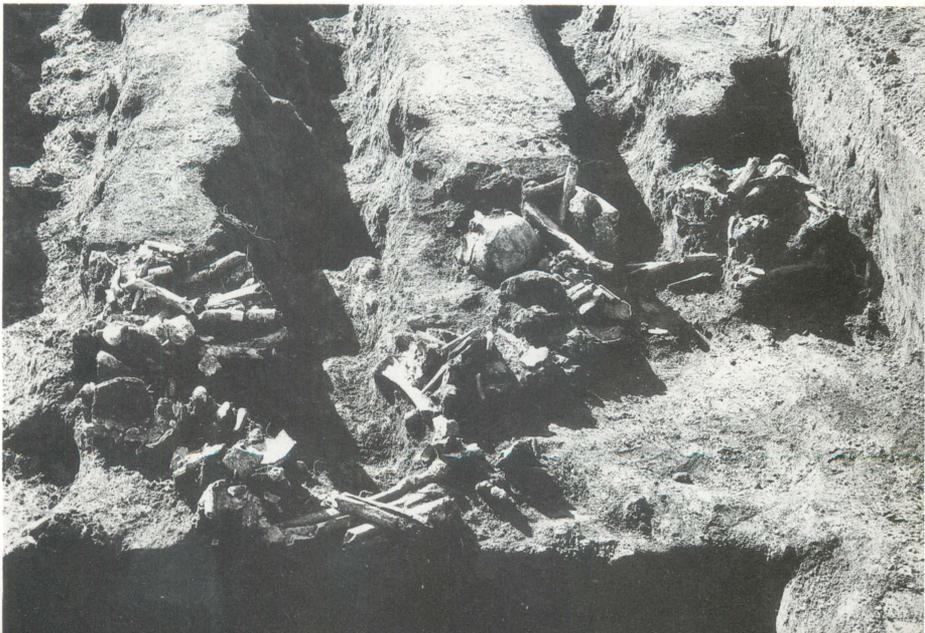
6 T
西から



6 T-0 1



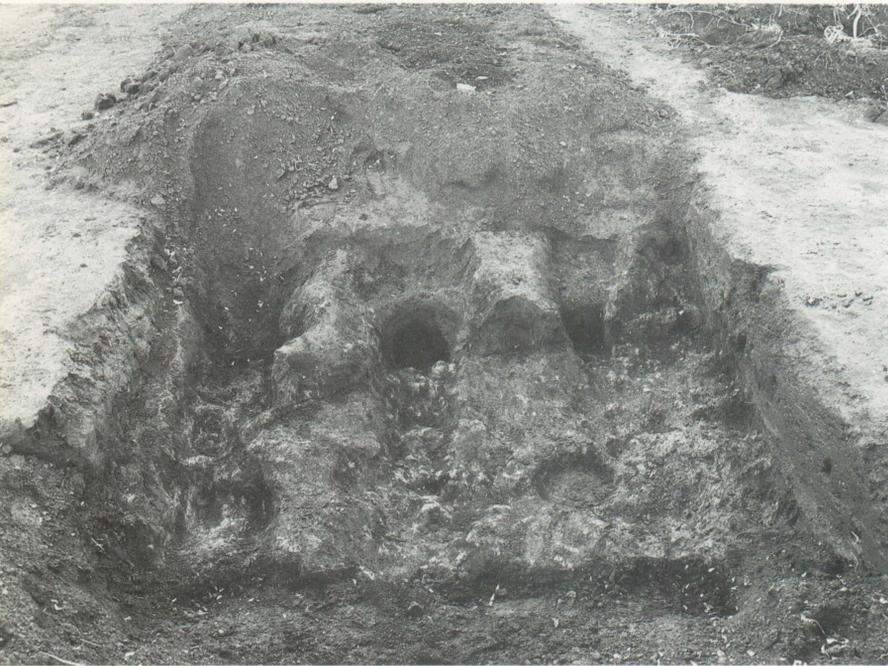
6 T-0 1-1
出土状况



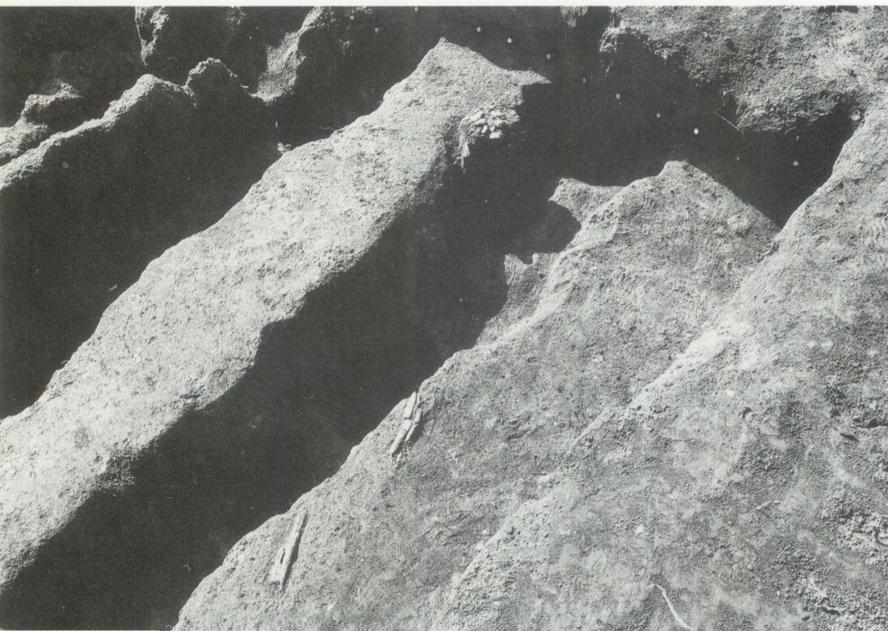
7 T-0 1
人骨群



7 T-01
椎骨出土状況



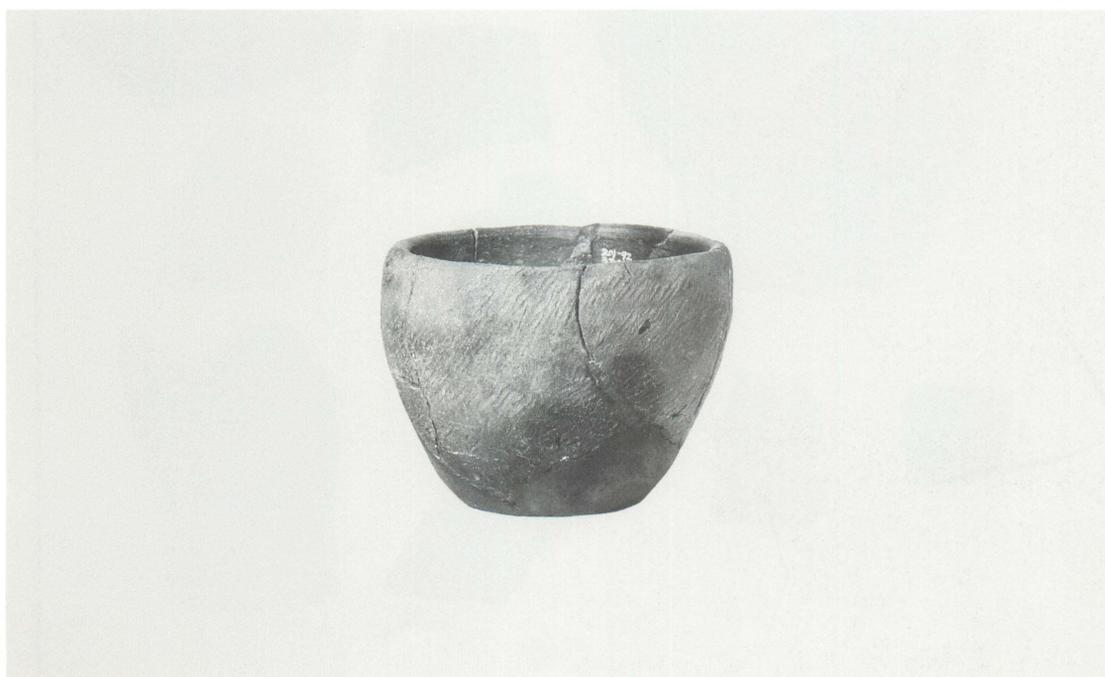
7 T-01
土壌検出状況



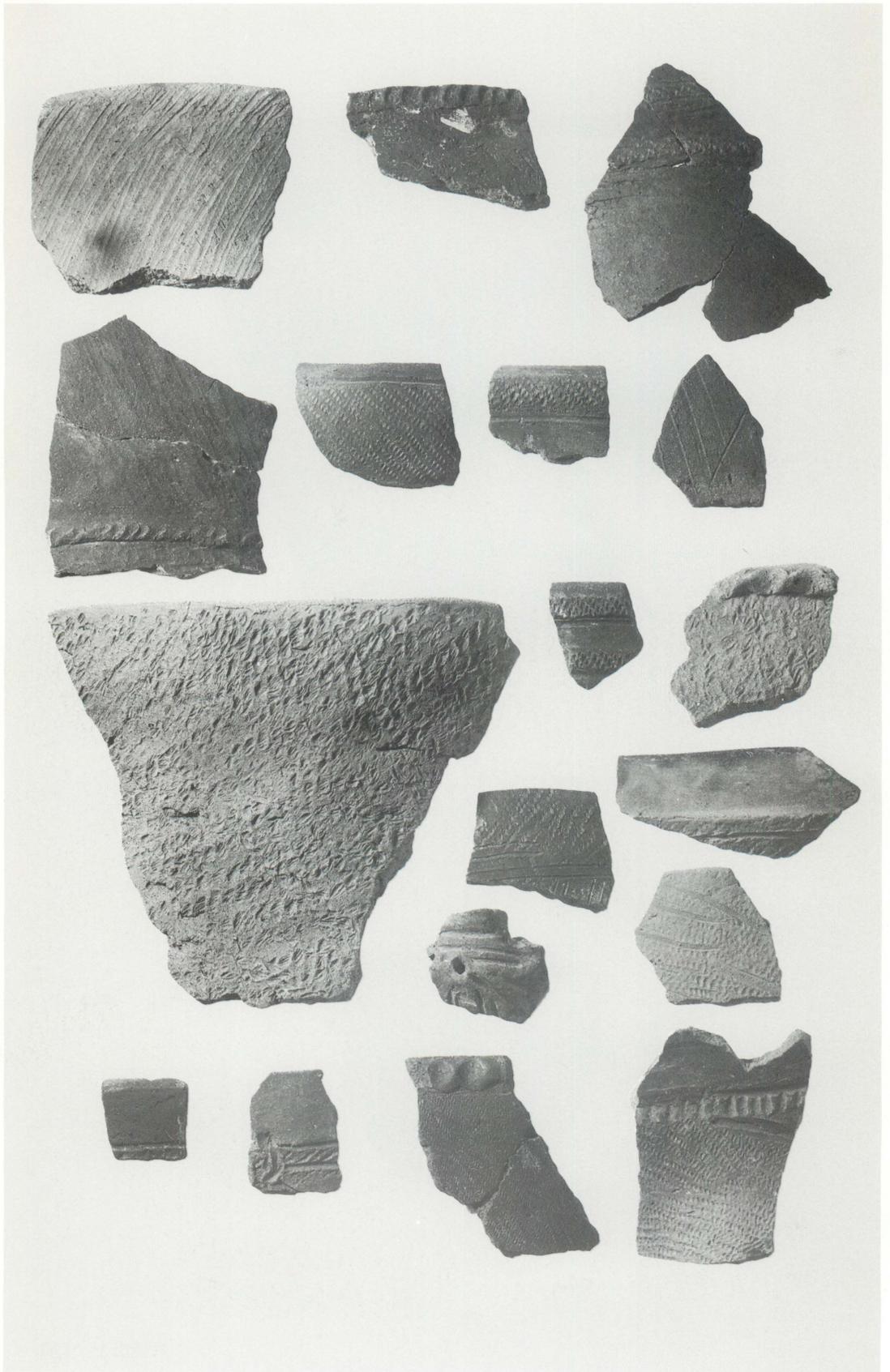
3号人骨
7 T

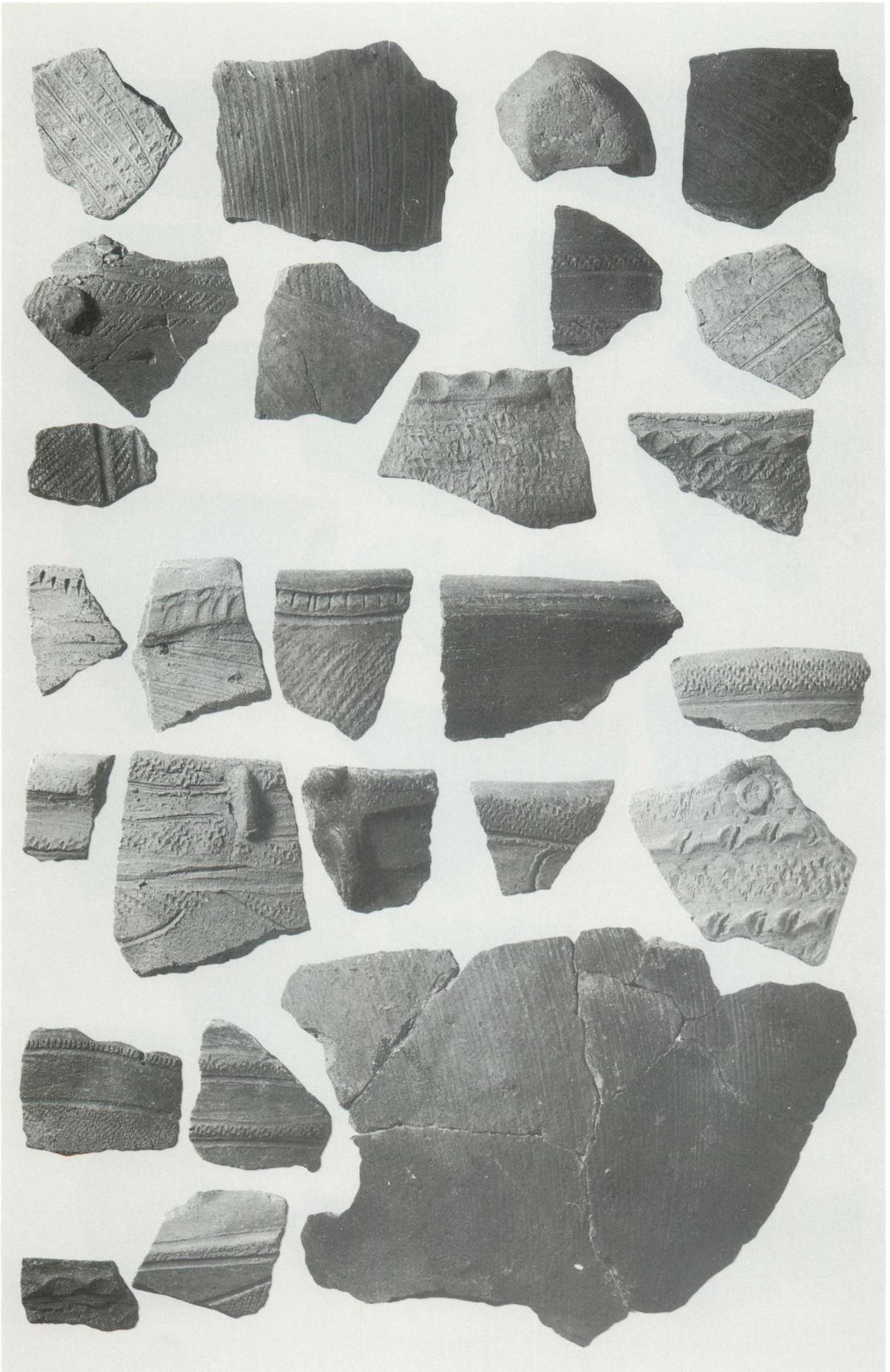


6 T-01-1

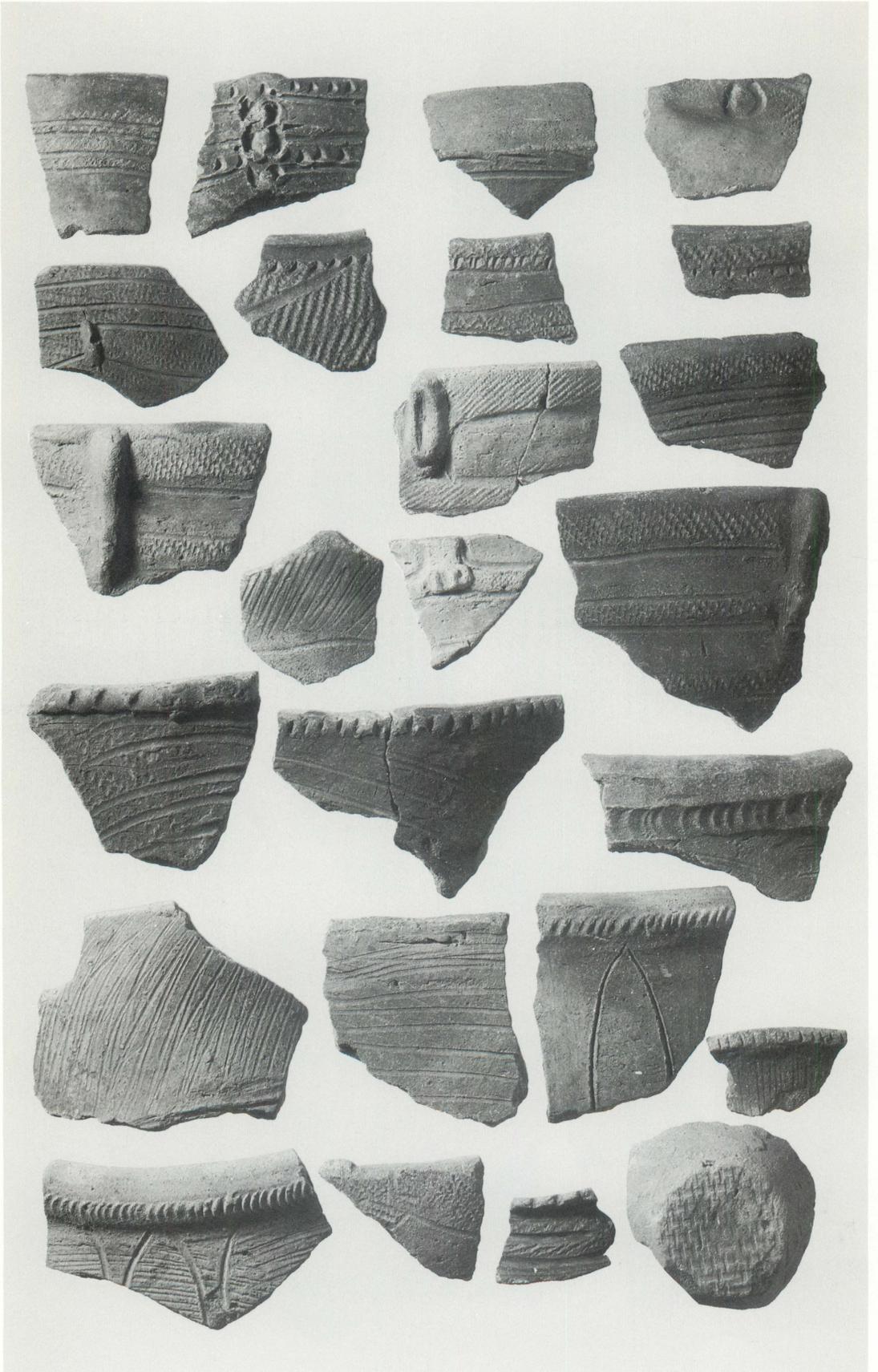


3 T-01-1
遺構出土土器(1)

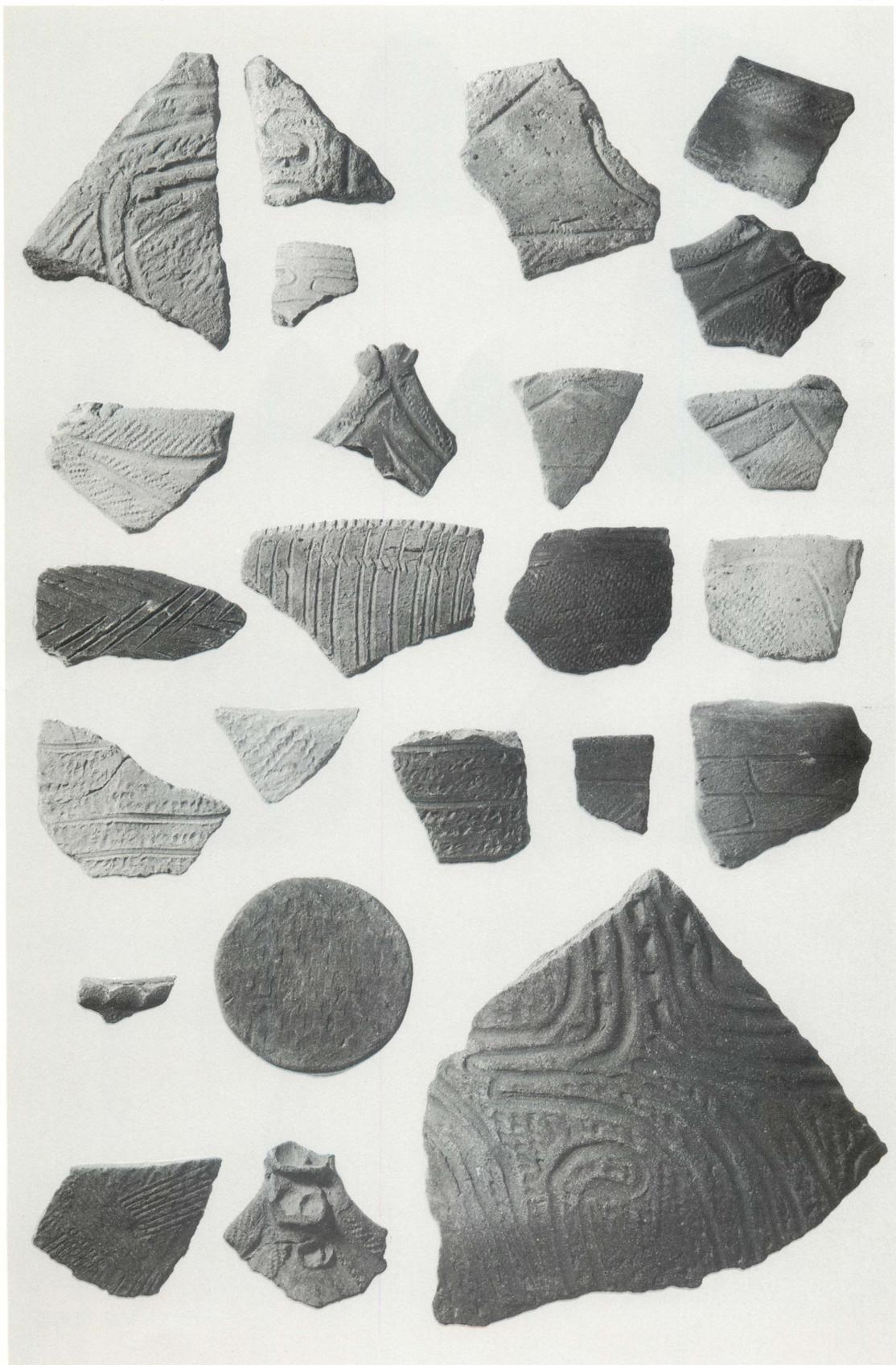




トレンチ出土土器(1)



トレンチ出土土器(2)



トレンチ出土土器(3)



石器



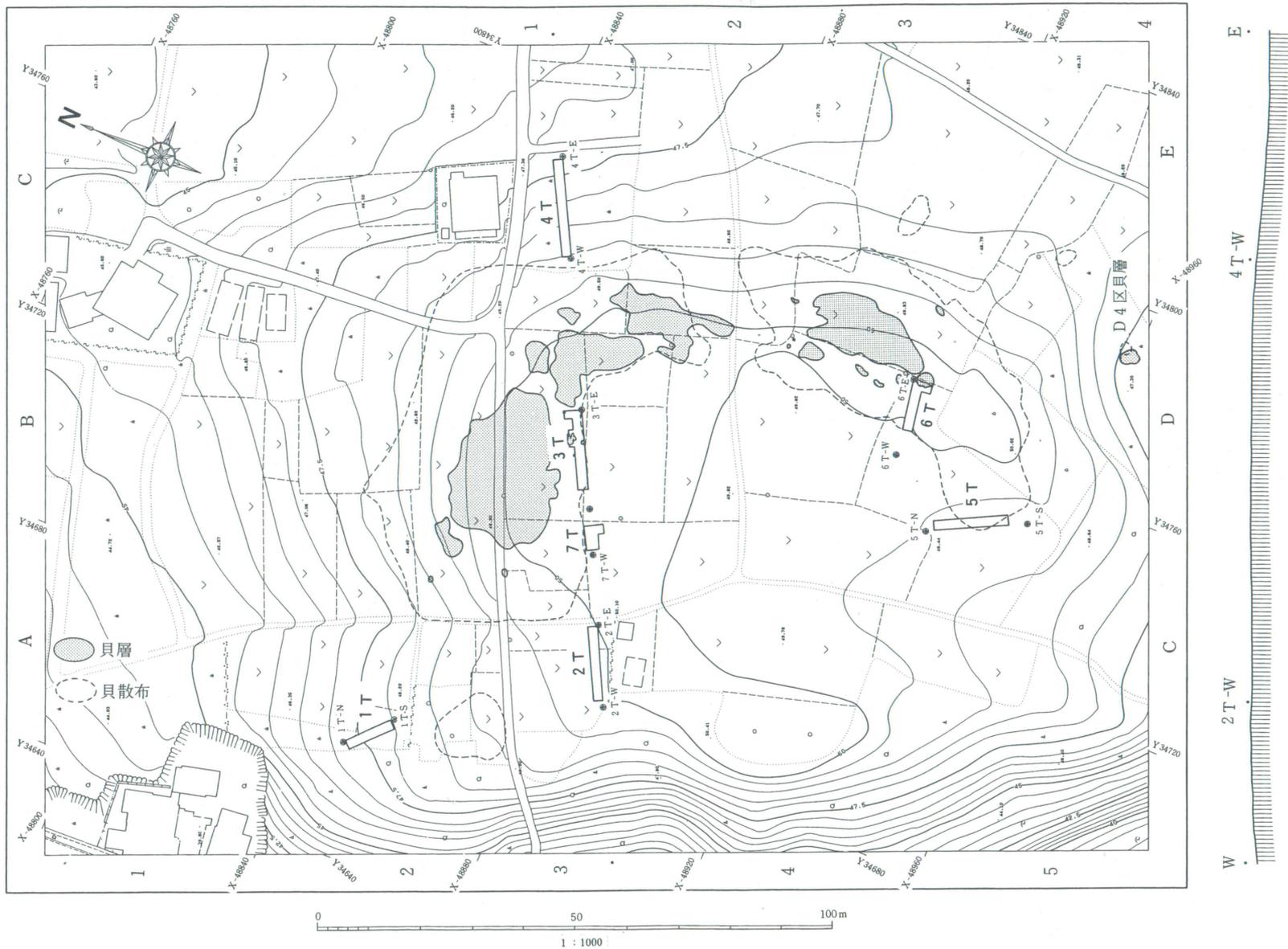
土製品



骨角器

石器·土製品·骨角器

誉田高田貝塚地形測量図



千葉県文化財センター調査報告第203集
千葉市誉田高田貝塚確認調査報告書
——千葉県主要貝塚確認調査報告書第3集——

平成3年3月30日発行

発行 財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡無番地
印刷 ワタナベ印刷株式会社
千葉市今井3-21-14

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。

正 誤 表

ページ	行	誤	正
14	20	加曾利E	加曾利B
28	15	加曾利B末	加曾利E末
44	2	八坂目台貝塚	八反目台貝塚